

鄉土史講話

山形縣聯合青年團

特 243

884

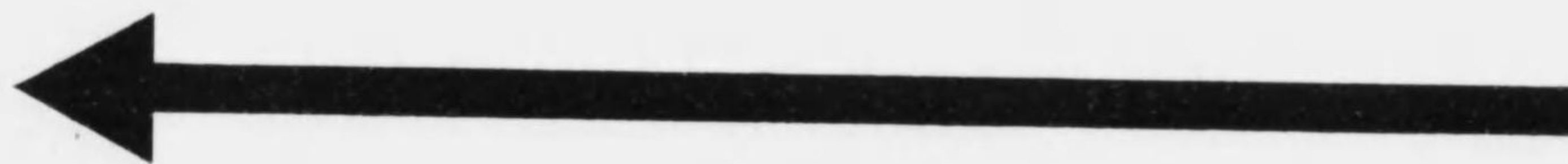
講座第一輯

343

392



始



特 243
884



講座 第一輯

郷土史講話

山形縣聯合青年團



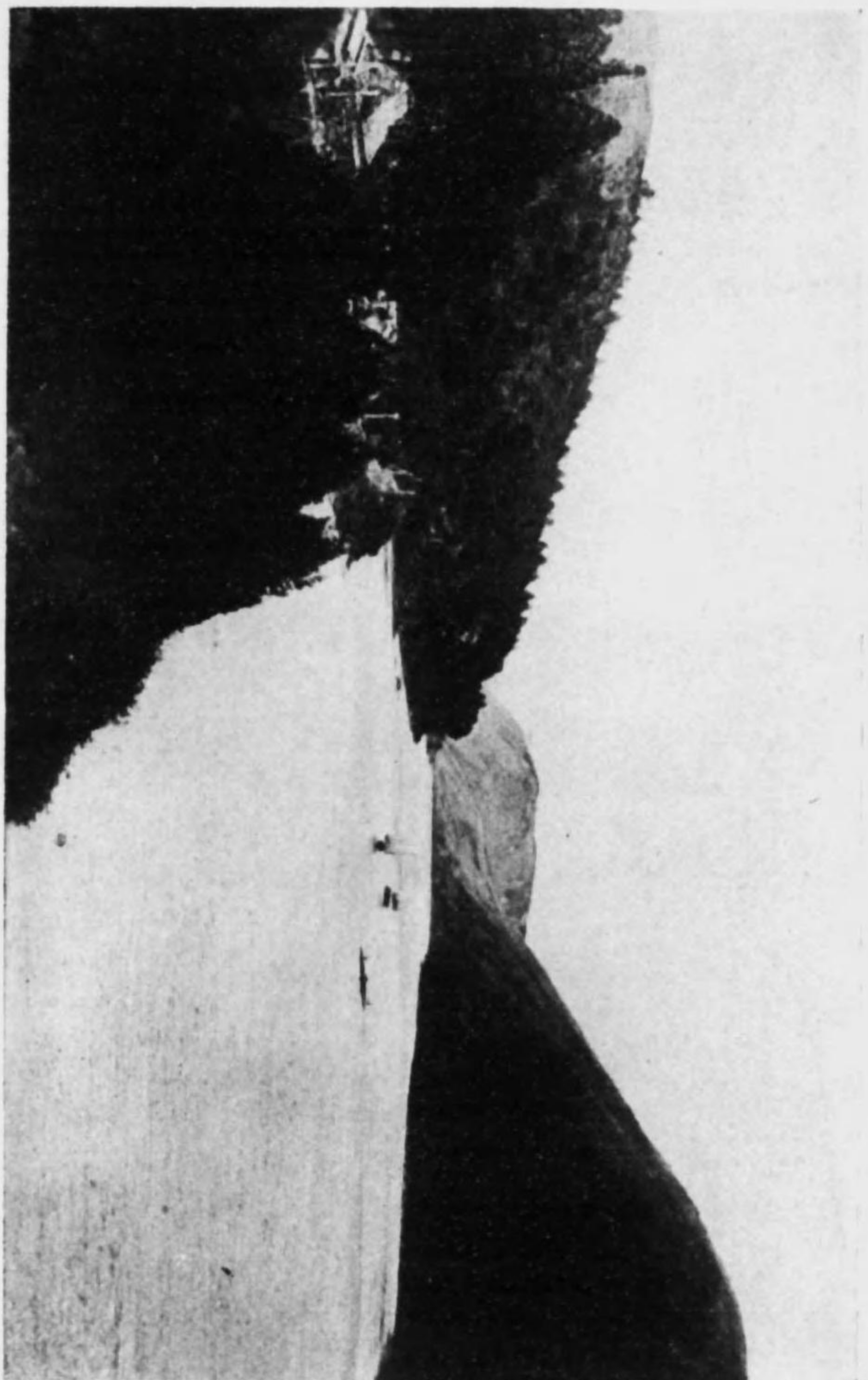
郷土史叢書

山形県郷土史叢書



歴史上より見たる我が郷土
歴史の跡を顧みて
郷土の誇り最上川

五十嵐晴峰



川上最の榮光

光榮の川上
最上の風景
を撮影した
写真集

第十四頁

郷土史講話

目次

歴史上より見たる我が郷土	序	言	一
一、史蹟	一	二	二
二、人物	二	九	九
三、名勝	三	二	二
四、天然紀念物	四	一四	一四
五、郷土民性の陶冶	五	一五	一五
歴史の跡を顧みて	一七	一七	一七
一、知己	一七	一七	一七

二、壓迫されたる東北	……	一八
三、虐げられたる東北人	……	一九
四、「人國記」に現れたる東北	……	二三
五、一山百文の譏	……	二六
六、北日本文明の評價	……	二七
七、覺醒發奮の秋	……	二九
郷土の誇り最上川	……	三五
一、最上川と文化	……	三五
二、最上川の交通	……	三六
三、大石田船役所	……	三八
四、河村瑞賢と最上川	……	四〇
五、置賜村山兩郡間の通船	……	四三
六、最上川と破船	……	四五

七、文學に現れたる最上川	……	五二
(1) 歌枕としての最上川	……	五三
(2) 源義經の北國落と最上川	……	六二
(3) 聖僧深庵と最上川	……	六五
(4) 俳聖芭蕉と最上川	……	六九
(5) 旅人と最上川	……	八三
八、光榮の最上川	……	一〇一

歴史上より見たる我が郷土

序言

回顧すれば古今三千歳、長い／＼時の流れに浮沈極りない我が郷土文化の蹟を辿つて見たいが、それは唯たに温古知新の趣味性からばかりではない。郷土は世界の縮圖である。郷土を通じて我等が國民性を凝視するに共に、世界人類の文化の發達を臚ろげながらも見たいからである。英の詩人スコットは嘗て歌うて曰く。

外遊を了へて歸り、足郷土を踏む時

是れ洵に我が郷土なりと獨語せず

又燃ゆるが如き喜悅の念を生ぜざる

冷々淡々たる精神を有する者ありや

若し此の如き徒あらば、乞ふ之に注目せよ

詩人豈彼を謳歌せんや

スコットは斯くの如く愛國心を高唱して郷土を讚美した。實に郷土を愛するものは國を愛するものである。黄金花咲く陸奥ミ謳はれたる我が東北地方は、日本文化の中心を距ること遠く從て人文の發達は常に他に後るゝを免れなかつた。然し我が郷土たる山形縣の如きは、東北の一隅に僻在するけれども、文化早く開け頗る史蹟に富み、且つ山容水態他に秀て、景勝の地も亦た尠くない。こゝに我が郷土の片影！廣き野に展開された郷土文化の一鳥瞰圖を作つて見たい。現在は過去の波のよせては返へす反影であり、將來は現在の浪の彼方へ浮ぶ泡沫である。吾人が過去の歴史を回顧するは現在の立場を覺知すると共に、將來に於ける我が郷土の發展に資せんが爲に外ならない。

一、史蹟

太古の事は詳かでないが、我が郷土の到る所から豊富に石器時代の遺物が出土するを見れば先住民即ち所謂蝦夷が東西に蟠居して……彼の最上湖や置賜湖や庄内平野の高臺の地に居を

占めて……原始的なそして赤裸々な生活を營んで居つたこゝが推知される。そこに大和政府を中心としてゐた優秀な民族が、人口の稀薄なそして土地の廣い我が地方を開拓して移住し、蝦夷を同化すると共に大に拓殖に力を盡くされたことは史上に明らかである。

今より一千二百二十有餘年前、元明天皇の和銅元年に出羽郡を建置されたが、其の以前に於て既に出羽柵を置き、其れを中心として蝦夷を防禦すると共に、四方に向つて拓地したものであらう。近年發見された飽海郡本楯上田兩村の地域に存在する柵址は、即ち其の遺址である。従つて蝦夷は漸次北退し、拓殖の業頓に進むにつれて、遂に出羽郡をして統一され、同五年には陸奥越後の二國を割いて出羽國を置くまでに進展したものである。此の王朝時代には、豺性狼心の蝦夷蝦狄が、朝に夕に常に争鬪を絶たなかつた。歴代の聖帝は大御心をこゝに注がせられて、大に其の馴服を企圖せられた。今之を我が郷土の史實の上から徴しても、或は大野東人が軍事上の必要から玉野新道を開鑿し、東太平洋と西日本海との連絡を圖つたことや、或は最上川の交通に意を注ぎ舟楫を通じてその便をはかり、或は國分寺、濟苦院、立石寺、若松寺、慈恩寺、吉祥院等の名刹を創し、大物忌神社、月山、湯殿、羽黒神社等の大社を建てなごして

敬神崇佛の念を興起せしめ、克く邑民を導き人倫を教へたるなき、其の事績の一端が窺はれる如何に未開の人民が深く其の朝廷の恩澤に浴して歡喜したてあらうか。

藤原氏專政時代にあつては、徒らに朝權を壟斷し、卿相は驕奢淫佚に耽つて敢て國政を省みない。國司鎮將があつても遙領遠管で、豪族をして租調を誅求せしむるに過ぎなかつた。東北の如きは目するに夷狄を以てし、國民を呼ぶに兇奴とさげすみ、愚民との、しり、半ば獸視した感がある。されば國司は租税を徴して私腹を肥すのみで、民に仁政を布き地方の開発に力を盡すといふやうな事は少ない。従て地方の豪族は勃然として起らざるを得なかつた。

奥羽の歴史上の一異彩は平泉の文化である。平泉は東北の奈良である。之れ藤原清衡の奥羽二州を押領してから、父子三世相續ぎ一王國をなし、二州を專斷して頗る勢力が強大であつた我が郷土も平泉文化の影響を受けたてあらうが今に至り史實の徵すべきものがないのは遺憾である。彼の源頼朝の平氏を倒して覇府を鎌倉に創するや、自ら三軍を率ゐて白河の關門を突破し、秦衡を攻滅した。茲に於て三代の驕奢一炬に盡き、榮華の夢は空しく金色堂に跡を留めて今猶ほ行人をして懷古去る能はざらしむるものがある。

都をば霞と共に立ちしかき秋風ぞ吹く白河の關

ミ、能因法師が詠みたりしその白河の關は、頼朝の家臣梶原景季をして

秋風に草木の露を拂はせて君が越ゆれば關守もなし

ミ歌はしめ、一行をしてほ、笑ましむる所あつた。文治役後東北の文明は頗る自由になつて急速の進歩をなした。そして頼朝は親臣をして之れに代はらしめた。當時我が地方の地頭としては、寒河江に大江親廣、谷地に工藤行光、長井に大江時廣、田川に武藤氏平の諸氏が割據して其の地方を統治し、郷土文化に資するところが多かりしは勿論である。

北條氏が天下を掌握するに當つて、義時の暴戾なるいまはしい承久の亂があつた。此役に於て我が大江親廣は王事に勤王を盡くしたが、北條氏の爲めに譴責された。其の死を免れたのは父廣元の援助によつたからであらう。彼の一天萬乘の君にして佐渡に還幸あらせられた順徳天皇は、北村山郡正殿の地に遁れさせられて、其の地に崩御遊ばされたミ傳へられてゐる。天子塚はその御陵ミ里人に敬はれてゐる。

やがて北條氏が亡びて建武中興の世ミなつたが、公卿ミ武人ミの軋轢甚だしく、遂に足利尊

氏が一大勢力を得て中興は忽ちに敗れた。南北分立の秋にあたつて、北畠親房が正統の天子を擁して、我東北の結城、田村、伊達、葛西、南部、大江、武藤其他の諸族を叫合して、南朝の勢力を東北に於て挽回せんを圖られた。然るに親房の長子顯家が安倍野の合戦に武運拙なくも戦歿されてから、弟顯信の活動は殊に我が郷土に最も深い關係を持つてゐる。正平二年九月宇津峯城陥るや、顯信、守永親王を奉じて出羽に通れ、田川郡立谷澤城にあつて、陸奥の諸將に檄を飛ばし頻りに歸順を誘告して義兵を擧げしめた。同六年に北軍の將吉良貞經が、銀山越えから玉野を経て新庄方面に進軍會戦した。顯信北軍を撃破し更らに追撃して貞經等を國府寺に討ち、貞經等が退いて荒谷に陣したが、二口越えをして陸奥に敗走した。今の東村山郡山寺村大字荒谷の地は當時の古戰場と傳へられてゐる。然るに足利氏は百方力をつくして、親族諸將を東北の野に分封して壓迫を加へた。斯波兼頼が我が山形に按察使として來たのも、南朝方の勢力を削ぐ爲めであつた。顯信が兵を藤島城に擧げ北軍を惱まし、出羽一の宮たる大物忌神社に國家興復の祈願をこめたのもこの時であつた。寒河江の大江元政の節に殉じたのも、大江時茂の子溝延茂信の寒河江漆川に自殺を遂げたのも兼頼の入國後であつた。文中二年三月には大

江茂時が卒して、四男の時氏が遂に兼頼の軍門に降つた。そして南風競はず遂に天下の權力は足利氏の掌握する所となつた。天授五年兼頼歿後其の子孫相繼いで當地方を治め、郷土文化の基調をなしたのは實にこの時代である。

足利氏亡び織田氏替り、遂に豊臣秀吉が天下を平夷し、親しく會津に遠征を試みて奥羽二州を宰割し、土田を檢し、貢賦を定め、大に東北の革政を促進せしめた。彼の征韓の役には伊達政宗、最上義光、直江兼續を始め東北の諸侯多く參陣した。秀吉歿後徳川家康は、關ヶ原の戦勝に依り海内を掌握した。關ヶ原の餘波戦は我が山形地方に起つて、長谷堂城を中心として、山形城主最上義光、上杉景勝の名將直江兼續と、兩雄雌雄を決せんとして、一大修羅場を演じたが、直江は關ヶ原の敗報に接し直ちに退却した。兼續は文武に通じ、雄膽にして機略に富みたる良將である。出ては將となり入りては相となり、上杉領士民の爲めに粉骨盡瘁した一大偉人である。家康は意を諸侯の配置に用ゐ、親藩譜代、外藩諸侯と犬牙錯雜相箝制せしめた。當時我が出羽には上杉、最上、佐竹の諸氏があつた。就中最上氏は最も強大であつた。義光は戰國時代の生んだ東北の諸大名のうちでも、特色ある大人物であつた。置賜の上杉領を除く外現

今の山形縣と秋田縣の由利仙北の二郡をも一統して政治を布いた。兼頼以來代々の事業は、義光の事業を完成せしめんが爲めの準備も見らる、まで強味があつた。然し彼の歿するや漸く九年、孫義俊の時遂に削封せらる、の悲運に會したのは地方開發の爲め實に惜しむべきである。最上氏亡ぶに方り、庄内に酒井忠勝、新庄に戸澤政盛、山形に鳥居忠政、上山に松平重忠、左澤に酒井直次等に分封し、自餘の地は悉く幕府に直隸し、代官をして之を管知せしめた。而して山形、上山二城の如きは、殆んご譜代諸侯轉徙移封の地となつて領主は轉々して走馬燈の如く交替した。徳川昇平三百年の治下に於て、我が郷土も稍文化に霑ふ所あつたが、それでも關西の文明には比較すべくもなかつた。徳川末期に於て外船渡來の事があつて、尊攘討幕の議論が沸騰し、將軍徳川慶喜遂に大權を奉還するに方り、奥羽の諸侯同盟して之を救援したが、幾ならずして降伏歸順海内全く定つた。是に於て陸奥を割いて五國とし、出羽を割き二國とし、藩を定め縣を置いて政治に便したが、次で藩を廢し、縣を置き郡を定めた。明治維新の大業の基礎を形造つたのである。大正の御代となつては郡制を廢止して、町村自治の發達を圖り内外多事なる昭和の今日に至つたのである。

二、人物

長い歴史の行途に於て、我が郷土の山河にはぐ、まれた偉大な人物も尠くない。米澤の上杉鷹山公の如き名君を出したのは我が郷土の誇りである。公は資性聰明、文武兩道を激勵し、大に士風を揚げ、儉素を旨として人材を登用し、殖産興業に力を效された。又上杉齊定の如きは常に意を國產の獎勵とその改善に心を注がれた名君である。庄内藩の英主酒井忠徳公は夙に學事に獎勵し、儉素を勵行し、士氣を鼓吹せられた。彼の最上徳内の如き蝦夷探險の魁をなし、露人の我が領土を侵畧するを憤慨し、蝦夷の開拓に盡瘁された甚大の功没すべからざるものがある。會田安明、安島直圓、松永貞辰の如き、本邦算學史上の明星も出た。神保蘭室、白井重行の如き、地方文化に寄與するこゝ多大なる學者もある。夙に四方の志を抱いて弘く天下の志士と交り、勤王愛國の爲めに奔走せられた清川八郎、憂國の志士雲井龍雄、經綸の志を抱いて國事に奔走した金子清邦の如き、明治戊辰の役に際し勤王を抽んでた吉田大八の如き偉大な人物も出てゐる。更に新庄藩主戸澤正實の如きは、新庄の小藩を以て奥羽同盟軍の間に孤立し、

終始一貫勤王の忠節を完うせられた英主である。其の他荏戸善政、竹股當綱、藥科松伯の如き本間光丘、黒井忠寄、菊池藤五郎、喜早伊右衛門、佐藤藤藏の如き、或は藩政を改革し、或は公共の爲めに盡瘁する所多かつた。又小關三英の如き蘭學の先覺者や。和蘭醫學者として有名な堀内忠寛も出た。又京濱間本邦最初の鐵道建設に大功ある佐藤政養は庄内出身の人である。刀鍛冶としては彼の月山の如き、水心子正秀の如き、大慶直胤の如き名刀家をも出した。畫家としては寒河江の郷目右京進貞繁、柳澤の西塔大原、六田の永耕、山形の細谷風翁なども此の地の産である。明治文壇の曉將高山樗牛や、彫刻家として有名な新海竹太郎の如き皆我が郷土を彩る花である。將た理學界にその人ありと知られた日下部四郎太博士、去秋物故せられた米澤の名儒伊佐早謙先生の如き永遠に生くるの學者である。

此等偉大なる人物の蔭には常に隠れたる女性の大きな力がありしこゝを見通してはならぬ。我が郷土に於て女性にして始めて國史に見えたのは、清和天皇の貞觀十三年二月十四日（紀元一五三一）出羽國田川郡の節婦大荒木臣玉刀自が、夫の死後庵を墓側に結び佛教に歸依して節を守つた爲めに位二階に叙せられ、一戸の内租を免ぜられ門閭に表彰せられたこゝである、之

れが本縣に於ける最初の表彰者である。又彼の米澤城主上杉定勝の女徳子は前田利治に嫁したが夫卒去の後落髮して隱之尼と云ひ、參禪の餘詩歌を嗜んで其の譽れが高かつた。延寶五年（二二三七）一月元旦に

歲月因循又回陽、和風到處發清光、春心自得愜禪意、祖苑封疆花木香。

と吟誦した、又をりにふれて

濁りなきものこゝ心をわするなよ身こそ浮世の色に染むこも

の國歌を詠じ高潔な一生を送つた。亦た彼の西村山郡大谷村の烈婦阿澄の如き、夫を扶け家を理めよく其子を教養し大義名分を以て一生を終始した女丈夫もある。明治文壇に令名を走せた樋口一葉や稻舟女史の如きは最上川の清澄にはぐくまれた女流作家である。其他孝貞賢淑の女性も少くない。今は其の一例を示すに過ぎない。

三、名 勝

更らに眼を轉じて名勝を眺むれば、自然に恵まれた我が郷土は、山嶽丘陵、湖沼瀑布、河泉

園林なきの名勝地亦た尠くない。特に本縣は温泉の湧出頗る多く、夙に温泉縣として其の名内外に響いてゐる。若し夫れ彼の溶々として縣下を縦貫する最上川に至つては、ひとり風景の勝れたるばかりでなく、實に時代の寂びがある。古歌に

最上川のぼれば下る船舟のいなにはあらずこの月ばかり

の歌を始めとし、古來歌枕として文人騷客の吟囊に入るものが多い。彼の源義經の京を忍び出で、北越から鼠ヶ關の關門を突破して三瀬に至り、大寶寺から清川の津に出て、風景を稱しながら陸奥の平泉に通れたのもこの名川である。俳聖芭蕉も

五月雨をあつめて早し最上川

の名吟を残した。大正十五年一月十八日、宮中歌御會始に於て、新年御題「河水清」に對し、畏くも 今上天皇陛下が未だ東宮にましまし、をり、最上川を主題に遊ばされ

廣き野を流れ行けきも最上川

海に入るまでにごらざりけり

と玉詠あらせられた光榮ある最上川である。

彼の山寺の勝景に至つては、山高く水清く、奇巖幽洞の勝に富める。神祠古寶を保存する。關北隨一の靈場と稱せらる。彼のそ、りたつ百丈巖は、高僧慈覺大師の入定せられたり傳へらる、名窟である。そして彼の名高い國寶なる立石寺如法經所碑の金石銘は、實に千古の史蹟を物語つてゐる。根本中堂は堂構の壯、建築の牢尋常工事の比ではない。夙に特別保護建造物として指定されてゐる。芭蕉翁をして

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

と歌つて去るに忍びざらしめた幽寂の境である。

羽黒、月山、湯殿の三山は、古來出羽の三山と稱せられ、其の境域甚だ廣く實に壯大である。羽黒山の石鏡の左右は千古の密林を以つてミざされ、祓川の清流その間を流れ、攝社散點風景佳絶である。圓滿具象の月嶺は四時白雪を存し一望千里景頗る快豁である。湯殿山は

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

神祕の靈山である。

彼の大沼の神池は水色清冽點塵を留めず。湖岸老松古杉蒼々とし自ら仙境を劃ぎる。時あり

て大小の浮島聚散離合、逍遙して浮遊する島の運動は、實に天下の奇觀である。共に學界の誇りである。

見よ彼の鳥海の峻峰に至つては實に壯嚴雄大そのものである。長久保赤水嘗て歌うて曰く

鳥海山高北海隈、岳雲溪樹望悠々、不知何日大鵬翼、化作名山鎮羽州。

眞に此の名山は我が郷土の鎮である。絶頂に國幣中社大物忌神社ありて出羽國の鎮守一の宮である。

金峰山は鶴岡市の南方に屹立せる靈山で勝景の地である。古七葉山の神跡をこゝめ、その西麓高坂村洞春院は楠正儀の子孫能勝の開基で、南朝凋落の悲哀を物語つてゐる。其他我が郷土には吾妻、朝日、藏王の諸嶺ありて勝區を劃してゐる。彼の飛島の孤島の如きは別天地の勝景である。

四、天然紀念物

天然紀念物として有名なものは、東置賜郡伊佐澤村の久保の櫻である。幹の周圍三丈五尺高

さ八間餘、稀有の巨木である。桓武天皇の朝坂上田村麻呂が蝦夷征伐の時、豪族久保氏の娘玉女厚く之れに侍し、將軍軍旅を收めて去るや、玉女追慕眷戀の情に堪えず遂に病歿したが、將軍之を聞き一株の櫻を玉女の墓に手植して、墓標としたのである。傳へられてゐる。

又北村山郡東根に大樟がある。周圍四丈高さ九間、樹齡五百年を閱みしてゐる。正平の昔小田島城主平朝臣長義の庭園に植ゑられたものだ。傳へられてゐる。

西田川郡上郷村大字水澤字石山、熊野神社の境内にある大杉で、幹の周圍九メートル餘を越え、杉の巨樹として有數のものである。

之等は何れも内務省から天然紀念物として指定されてゐるもの、みであるが、其他巨木名樹數ふるに邊がない。

五、郷土民性の陶冶

想ふに彼の城址や古刹や靈廟や、或は古戰場或は名君賢臣の足跡、或は忠孝節義の舊蹟、或は碩學者宿の故蹟なき、今尙ほ其の遺蹟を留めてゐるものが多い。況んや更らに太古原始の化

石、先住民族の遺跡、上代の古墳なごも之れあるに於てをや、我が郷土は史蹟に名勝に天然紀念物に大に恵まれてゐるのは幸福である。

金甌無缺の光輝ある特色を有せる我が國は、實に二千五百有餘年の史乘より發揮し來りたる者に外ならない。忠君愛國の情に燃えてゐる吾等民族の性情が、必らず正史の美蹟によつて永遠に涵養せらるゝであらう。我が實質剛健なる縣民性の涵養も、吾等の祖先の残したる崇高なる傳統の強き足跡を辿つて、立派な郷土民性を築きあげねばならぬ。

廣き野を流れ行けども最上川

海に入るまでにごらざりけり

この貴き高き御歌の大御心を深く體得し、永遠に縣民歌を高唱して我が郷土を讚美せん。

歴史の跡を顧みて

一、知 己

孫子曰く

彼を知り己を知れば、百度戦ふも危からず。

彼を知らずして己を知れば、一度勝つも一度敗る。

彼を知らず己を知らざれば、戦ふ毎に必ず危し。

之れは獨り兵法に限らない、學術の上に於て、政治の上に於て、事業の上に於て、處世の上に於て亦た然りである。敵の實力と己れの實力とを十分知つてこそ百戦百勝する。又自己の地位と實力とを知るに共に、己が目的の適するか否かを熟知して始めて成功する。吾人は深く過去の歴史に鑑み、現在の立場をよく考へて事を爲すの必要がある。故に先づ歴史上に於ける我が郷土は、元來如何なる地位にあつたかを顧みて、將來の方針を定めて努力せねばならぬ。

二、壓迫されたる東北

古來中央文化の大波浪は、絶へず僻遠なる我が東北の地を襲つた、其の度毎に多大な影響をうくるを免れなかつた。彼の前九後三の二大役は、奥羽發達史上に於て一時期を劃するものである。若しその時安倍頼時や貞任、宗任の勝利に歸したならば、奥羽の文化に影響を及ぼすことが至大であつたらう。又源頼朝の東征によつて平泉の藤原氏が亡滅して、其の文化は悉く破壊されたが、若しも此の時に方つて彼我盛衰の位置を替いたならば如何であつたらうか。降つて南北朝時代に於ては、北畠顯家が十萬餘騎の東北軍を組織して白河の關を越え、關東の平野に殺到し、鎌倉を陥れ首尾能く畿内に乗り込んだが、顯家は安倍野の合戦に戦歿された、之れ又奥羽開發の運命を閉鎖された云つてもよい。戰國時代に於ても東北の大名が一般に小膽で遠大の志はなかつた。従て關西の大名から頃使された傾きがある。猶ほ戊辰の役に於ける東北は、徒らに賊名を負はせられて、西南地方から非常な壓迫をうけざるを得なかつた。之等の大きな激浪は、常に東北の山野に民衆を洗ひ去つて何物をも残さなかつた。斯の如く東北は常

に逆境の地位に立つを餘儀なくされて、壓迫されつ、今日に至つたのである。

三、虐げられたる東北人

又一面から觀察するに、東北人は常に卑しめられ、且つ虐げられて來た感がある。嵯峨天皇の弘仁六年に、小野岑守が陸奥守に任ぜられて、京師を發するにあたり、僧空海は長詩を賦して之を送つた。

(性靈集)

贈野陸州歌并序

戎狄難馴、邊笱易感、自古有、今何無、公抱大廈之材、出鎮豺狼之境、堂中久闕定省之養、魏闕遠阻龍顏之謁、雖云天理合歡、然人情豈無感歎、貧道與君遠相知、山河雲水、何能阻、白雲之人、天邊之吏、何日無念、聊抽拙歌、以充邊路之解願。

日本麗城三百州、就中陸奥最難柔、天皇赫怒幾按劍、相將幄中爭馳謀、

往帝伐、今上憂、時々牧守不能割、自古將軍悉啾々、毛人羽人接境界、
 猛虎豺狼處々鳩、老鴉目、猪鹿裘、營中挿著骨毒箭、手上每執刀與矛、
 不田不衣逐糜鹿、靡晦靡明山谷遊、羅刹流、非人儔、時々來往人村里、
 殺食千萬人與牛、走馬弄刀如電擊、彎弓飛箭誰敢囚、苦哉邊人每被毒、
 歲々年々常喫愁、我皇爲世出能鑿、亦咨焉、□□□、千人萬人舉不應、
 唯君一箇帝心抽、山河氣、五百賢、允武允文得自天、九流三略肚裏吞、
 鵬翼一搏睨此境、毛人面縛側城邊、凶兵蘆庫待治鑄、智劍滿胷幾許千、
 不戰不征自無敵、或男或女保天年、昔聞媯帝干舞術、今見野公略無匹、
 京邑梅花先春開、京城楊柳茂春日、邊城遲暖無春藥、邊壘早冬無茂實、
 天高雖、聽必卑、況乎鶴響九臯出、莫愁久住風塵裏、聖主必封萬戶侯。

此の詩のうちに、或は猛虎豺狼處々に鳩り、毒箭を營の中に挿んで、手には刀矛を執つて人を脅すか、或は不田不衣糜鹿を逐ふの徒で、人ミ牛とを殺食する殺人鬼であるミ評し、或は東北の人は羅刹非人の流であるミ申んだ、一言にして云へば東北は豺狼の境地で、人間は半ば獸

であるとして見てゐたのである、脱俗悟道の空海にして猶ほかくの如し、他は推して知るべきである。

藤原氏專制時代には殊に甚だしかつた、藤原秀衡の父基衡は、藤原頼長の莊園の地を支配して居つたが、基衡を呼ぶに「兇奴」を以てした。又基衡が仁和寺に依頼して、折角請ひ得たる勅額は、其の頼み主の素性が知れるミ共に無残にも奪ひ返されたこゝもあつた。彼の秀衡が鎮守府將軍になられた時、九條關白兼實は其の日記「玉葉」に

「奥州の夷狄秀衡鎮守府將軍に任ぜらる、亂世の基なり」。

と極評を下してゐる。又秀衡が陸奥守に任ぜられた時に、

「秀衡陸奥國司に任ぜらる、此の事先日議定あるこゝになり、天下の恥何物か之に如かんや、悲むべし悲むべし」。

ミ記してゐる、何たる冷酷な批判であらう、秀衡が國司になつたミで、「亂世の基」だの「天下の恥」だのミ、さゝこまでも夷狄視してゐる。東北の一王國の領主を見るこゝも尙ほ斯くの如きを見て、當時京師の人の東北人を卑しめたる、其の一斑を知ることが出来る。

鎌倉時代に至つても、奥羽地方は近畿地方のものから、夷狄の國として侮蔑された、彼の源頼朝が奥羽を平定し、文治五年に出したる法令の中に、

「出羽陸奥に於ては、夷の地たるによりて、度々の新制にも除き訖りぬ、偏に古風を守り、更に新儀なし」

とあつて、エビスの國であるこの理由によつて、一般行政から除外例としてゐる程で、即ち教化以外コンマ以下に見られて居つたのである。又治承五年に東大寺の重源が、大佛を再建せんが爲めに、寄附金を奥州に募集にこられて、澤山の金が集まつた、然るにその造立供養記を見るに、

「東は毛人の域に勸進して、夷類随分の奉加あり、是れ一の不思議なり。」

と云ひ、感謝どころか奇怪千萬な言辭を弄してゐる。又文治三年に重源の敬白文には、

「東鄙奥州の愚民、勸誘に赴いて善心に住す。」

なき、人を馬鹿にしたやうなことを云つて居る、如何に奥羽の人々が愚弄されて居つたか云ふことが知らるゝであらう。虐げられた東北人は、實にみじめなものであつた、之れや、こも

すれば、文化に遅れがちな僻遠の東北地方は、まことに餘儀ない事でもあつたであらうが、さりこは又情けないことである。

四、「人國記」に現れたる東北

足利時代に書いたと云はれてゐる「人國記」のうちに、

「日本の偏鄙成故に、人の氣の行詰りて、氣質のかたより、其尖なる事萬丈の岩壁を見が如に而、邂逅道理を知るこいへこも、改て知ると云事すくなく、たとへ知るこいへこも江水の流なくて、塵芥之積りて清る事なきが如し。

右之如之氣質故、頼母敷こころありて、亦なさけなき風俗也、人の行儀いやしく而、物語卑劣なれこも、勇氣正き事日本に可劣國こも不被思也、因茲朋友無益討果、主君へ志を忘、父母へ孝を忘なこする類、不知其數、雖然男子上下こもに、勇を以て本こする處なれば、偏鄙偏屈なりこいへこも、潔き意地あつて恥を知故、是を善とす。」

と云つて、行詰れる東北、偏屈なる東北人を見た、然し潔き意地あつて恥を知るの美德を讚美

した、而して又彼は陸奥と出羽とを比較して、先づ陸奥國は

「惣て此國、出羽、上總、下總、上野、下野の類、大形は人の音聲上ハ柏子也、然る故に心に倭成事なくて、差當る所の儀のみ大形に勤る可なり、然故に物毎至て思案工夫分別する事鮮き事、千人に九百人如此也。若又智有て氣質之變を去らんと志し勤る人有といへども其理之内之陽を以て是を用となす、故に何事も強身なり。」

と評して、現實的にして而も大陸的精神の強味を感得した、更に我が出羽の美點をあげて

「出羽國の風俗は奥州に大體不替也、然るも奥州の風儀よりは、律儀なる處有て知も亦上也、武士は我主親へ忠孝之志有て、下を使ふ之法を沙汰し、下藩は上をうやまう心有、百姓は地頭を頼む心入有て、他之村郷之者我頭を誹るを聞ては、則勝負を付るの類にて寔に頼母敷しほらしく有之所多く有也。」

斯くの如く羽州は奥州に比して、文化の度も進んでゐることをほのめかしてゐる。「人國記」の記者は茲に筆を改めて、我が郷土の女性を語つてゐる。

「此國の人は日ノ本の故也、色白くして眼の色青き事多し。女の風俗色白くかみ長くて、

其顔色もうるはしきといへども、其形儀音聲更に述に不及して惡き也、此國の上藩と上方の下藩と其甲乙を云ふに、上方の下藩女房にも嘗て不及也、然るも心底はやさしく、情有て氣の正き事も、上方の男よりははる／＼上なり。」

みめ姿、言葉なごのみやびやかなるよりも、心やさしくて情厚く、心の正しきこと、之れ我が郷土女性の誇りであらねばならぬ、彼の浮華輕薄に流れて、心の定まらざるは、吾人のこらざる所である。猶ほ記者は東北人を筆刀にかゝげて、總評して

「名人の名を呼ぶ程の人は不得聞を也、末代以て如此成べし」

と斷定を下してゐる。觀察の銳利なる實に味ふべき苦言である。東北人の氣質、長所、短所等を巧みに捉へて、遺憾なきまでに鋭いメスを振つてゐる。「勇氣正しきこと日本に劣るべき國とも思はれざるなり」なき、白河以北は日本でない、日本國內にありとも、怪しげな日本、夷狄のすこし進歩せる集團、日本にして眞の日本にあらざる屬國として見られてゐた。過去の歴史の頁を彩るに足るべき大人物は一人もなく、之れより推斷して「末代以て如此成べし」を豫言した「人國記」記者の暗示は、吾人をして一日も早く覺醒せよとの警鐘かも知れないが、それ

にしても餘りにありがたからぬ訓誡である。

(二六)

五、一山百文の譏

徳川時代に於ける東北は矢張弱者であつた、地の利を得ない爲めに、東北の諸大名は先見の眼識に乏しく、唯た興へられた運命の舞臺に跳躍する小役者に過ぎなかつた、總べてが消極的であつたから、従て關西地方の大名のやうに、重土捲來の活動は出来なかつた、文化の中心を去ること遠い僻地の、亦た止むを得ざる所であつたらう、特に明治戊辰直後の東北は、虐げられ卑しめらるゝこゝが甚たしかつた。

西南地方の人は東北人を呼ぶに、「一山百文」の代名詞を以てした、腐れた密柑を山ほぎ積んで、之れでもたつた百文だこ卑しめた、現今に於てもをり／＼新聞の見出に出現するこゝがある、慨嘆に堪へない。

又或る旅人は東北人を評して

「東北地方の人は、常に覺むるこゝを知らない、眠りの上手なこゝは日本一だ」。

こ名物の一つに數いて居つたものすらあつた。

朝寝して晝寝してまた夕寝して

こき／＼起きて居ねむりをする

こ愚弄されたのも、遠い昔のこゝてはない。然し我々祖先の努力で、日本の文明にも少しは貢獻する所あつたが、大勢は依然こして足利時代や徳川時代の如く、上方の後塵のみを拜し來りそれが惰性こなつて現代に至るまで残つてゐるのは遺憾である。吾人は茲に奮然こして起たねばならない。彼のいまはしき一山百文の代名詞を返上し、正しく強き東北魂を發揮して事にあたらねばならぬ。長い間眠れる東北から覺醒して、闇の夜に輝く北斗星の如く、前途の希望に向つて邁進せねばならぬ。太陽は早や東の空を染めつゝ、あるてはないか。

六、北日本文明の評價

大正の始め、米國エール大學の教授ハンチングトンが、世界各地方の住民の文明進歩の程度を測らんが爲め、諸國の權威ある學者に評點せしめて、各國人種の文明の程度を評價した事が

(二七)

ある。其の採點の参考となるべき要件は左の五項である。

- 一、地方の住民の自發的活動力
- 二、新思想形成力、及び其實行能力
- 三、自治力
- 四、他人種を統治指導する等、諸種能力具有の程度

採點の結果は左の如くである。

ウチ ント (6)	英 (7)	米 (25)	探 點 者
100 98	100 99	100 98	英 部南 部北
98 100 100	92 99 99	94 98 98	獨 部南 部中 部北
87 86 96	85 86 99	91 82 100	佛 部南 部中 部北
74	75	62	露 部中
100	100	99	米 部東
98	95	99	和 蘭
82	77	88	加 奈 太
75 67	80 61	85 60	日 部西 部北 部東
60 62 62	44 53 53	58 63 65	支 部南 部中 部北
48	59	50	墨 國

(112)

均平	ンテラ (5)
100.0 97.8	100 96
96.0 99.3 99.0	100 100 99
90.0 85.3 98.8	97 87 100
71.0	73
99.8	100
98.0	100
82.8	80
79.3 57.3	77 41
54.3 59.5 60.0	55 60 60
50.8	46

露は中部のみ、米は東部のみなるは、其他の部分は文明の程度に於て、大差ある故に之を省いたに過ぎぬ。右の點數を見るに、同じ日本でも西南と東北に於ては非常に差がある。東北だけでは平均五十七點三分で、立派な落第點である。歐米人が我が日本を如何に見て居るかを明白に表示してゐる。然し之は眞に日本人を理解しない外國人の皮相の觀察の結果かも知れないが兎に角北日本は南日本に比して、文明の程度が多少遅れてゐる事は事實である。我等は他山の石以て我が玉を磨くべきで、長所は益々發達に努め、短所は修養以て正さねばならぬ。

七、覺醒發奮の秋

吾人は歴史の跡を顧みて、文明史上の東北の地位を痛切に感ぜざるを得ない。我等は今、卑しめられ、虐げられ、常に壓迫をうけて逆境にたてる東北を見た。然れども古來我が東北の地

位を覺知して、虹の如き意氣を吐いて、都人をして後へに撞着せしめたる偉人もないではない彼の阿部貞任が源義家から攻められて、衣川の柵が陥つた時、義家は

衣のたては綻びにけり

と高吟したが、貞任直ちに

年を経し糸のみだれの苦しさに

ミ上の句をつけたミ云ふ風流な野武士の物語は、優雅なる都の武人を如何に驚かしたであらうか。

又宗任が捕へられて京師に送られた時、夷人を見やうとして、都大路は車ミ人ミを以て充たされ、大に壯觀を呈したミ陸奥話記に書いてある、ぶしつけな大宮人は、一枝の梅花を見せつけて、

「お前の國では、これを何ミいふか。」

ミ嘲笑するものもあつた、宗任はしミやかに、

我が國の梅の花ミは思へきも

大宮人は何ミいふらん

一首の和歌を詠じて返答したミ云ふことは、普く人口に膾炙してゐる。

又寛政の昔、庄内藩主酒井忠徳公の京師に行かれた時に、大臣方の御邸に饗應の事があつた月卿雲客は公の細禮を顧みざるを輕蔑し、障子襖の間からぬすみ見して笑ふものもあれば、年若き田舎者の大膽なる振舞よなき、櫻の花を携ひ來つて、和歌を請ふて嘲弄せんミする者もあつた、其の時公は、

「私の領地は日本の北端にあつて、都より幾百里なる山奥の山家に成長したる者、さうしてかやうな優長なる和歌の道を學び得やうぞ。」

ミ辭せられたけれきも、強て請ふて止まなかつたから、公は直ちに筆をこつて、

都人梅にもこりずさくら花

ミ麗はしく短冊に書き流した、一座の公卿等は皆々赤面して退席した、之れは宗任の故事の意に出たので、未だ宗任の梅の花にもこりず、我れに向つて櫻の花を咏めミ云ふのかミ、虐げられつ、あつた東北大名の意氣を示したので、それ以來は再びかゝるぶしつけな振舞をしなかつ

た云ふことである。

それは慶長三、四年頃であつた、侯伯伏見城に會する所あつたが、偶々東北の雄伊達政宗、懐から黄金の新貨を出して、人々に示して得意然として居つた。我が郷土の偉人直江兼續も末座にあつた、そしてその黄金を扇子に載せて翻弄して居つたが、政宗傲然として兼續を呼んで云ふには、

「兼續殿、その黄金を手にとつて見ても妨げない」

と、兼續之れに應じて云ふには

「我が公謙信の世から、身は先鋒の任を恭うしてゐる、豈夫れ馬上^{ホウ}を把るの手、斯かる賤塊に觸る、ここが出来やうか」

と武士の手にこるを恥として、扇を舉げて一煽すれば、新貨は翻つて政宗の前に落ちた、これには流石の隻眼龍も爲めに顔色がなかつたであらう。

吾人は各時代を通過して、虐げられ卑しめられた東北を見た、常に壓迫されつゝ、逆境にたてる我が郷土の歴史の跡を顧みたら、今や昭和更新の時代であつて、上に慈仁にまします聖天子あ

り、國に南北の隔てなく、國民一途一視同仁厚く天恩に浴してゐる、吾人は歴史の跡を顧みて政治に教育に實業に、あらゆる方面にむかつて覺醒發奮すべき秋である。

人 生 の 朝

晴 峰

青年諸君！ と私は強く呼びかけたい、

それは紅顔の花に似たる爲めの憧憬ではない。

偽りも飾りもなき穆實なそして純真な生命と、うつくしき曙の如き、うら若き「人生の朝」の所有者であるからである。

理想の明光と、新しき聲によみがへる、若人の理智と力とに信頼するからである。

山笑ひ鳥戯れ、天も地も悉く樂土なる若人の環境を祝福する。

されど居るに懶く、往くに懶く、生きたれども死せるが如く、若けれども老むたるが如き青年の何ぞ多きや。

濫りに近代悪思潮に沈溺するをやめよ。
徒らに人生の悲哀と煩悶とを説く勿れ。
お、青年諸君！ 興へられた清新活潑な青春の意氣はどこへ行くであらう。
燃ゆるが如き情熱は冷灰と化するであらう。
特に農村の青年諸君！
我等の理想郷は遙かに遠い。唯だ現實に即して一歩一歩行進をつ、けやう、そして常に自ら省みて自ら責むるの鞭をとれ。
新しき殿堂を開くべき鍵は、若き人々のふところにある。
お、青年諸君！ 私は希ふ、清く、強く、正しくありたいと。

郷土の誇り最上川

一、最上川と文化

月山高く大空に そゝる六千五百尺

日本海に躍り入る 最上の流れ六十里

その優麗の山ミ水 文化の色に映えしめよ

臥牛の山、漢江の水、彼の山の崇高ミ、此の水の秀麗ミは、我が郷土の誇りである、羽陽の文化は實に最上川の清き流れから生れたミ云つても決して誣言ではない、昔はこの川によつて文化は輸入せられた、實實剛健な縣民性もこの自然の懷ろにはぐ、まれた、上流置賜、中游村山、下游庄内の豊饒なる三大平野も、この川の母胎から生れ出た、最上川の未だ出羽丘陵を破つて日本海に注ぐに至らなかつた頃は、出羽丘陵ミ脊梁山脈との間に一大瀧水を泄へたであらう、置賜湖の如き最上湖の如き即ちそれである、その湖の水が水質の自然的浸蝕作用によつて

荒砥左澤間の峡谷が、村山盆地と置賜盆地とを連絡し、古口清川間の峡谷によつて、村山盆地と庄内平野とを連絡せしめて、一路日本海へと流れ込んで行つた、この川を中心として村落は形造られ荒野は開墾された、一方には此の川を利用して、昔から到る處に水驛が設けられた、船町、寺津、長崎、大石田、清川なぎ、何れも船舶が絶えず出入して物資を運搬し且つ分散した、特に酒田港に至つては日本西海岸の要港で、昔は萬船常に輻輳し、百貨重積頗る殷賑を極め、奥羽の商權を掌握した時であつたが、陸路交通の發達變遷につれて、河津の寂びれ行く跡を辿れば、そこに文明の悲哀を物語つてゐる。

二、最上川の交通

最上の流域實に六十餘里、縣下を一貫してゐる爲め、古今を論ぜず交通上主要なる問題として取扱はれてゐる、上古は何處でも陸上の交通が開けなかつたから、無理にも自然河川を利用したものである。我が古代民族の如きものも、最上川を中心として活動したであらう、そして朝に夕に筏や割り船で、此の岸から彼岸へと覺束なくも涉つたであらう、だん／＼と人智が

發達して、王朝時代には已に驛路の制を立てられ、陸には馬、川には船を置いて交通の便を圖つた、水路も始めは官人の乗用だけで、民間交通は甚だ微弱であつたことは言ふまでもない、彼の行基や慈覺の高僧が、御殿山を開鑿して最上川三難所の險を幾分とり除いて、通航に便したと傳へられてゐる、然し平安朝時代には、北陸道の水路が發達して、越前の敦賀が船の集中點となつて、我が出羽の船も定期航海する迄に發達したといふからには

古今集に

最上川のぼればくだる稻舟の

いなにはあらずこの月ばかり

ミ云ふが如く、最上川の交通も餘程進んで居つたであらう、昔は橋を架けることが大儀であつたから徒渉であつた、其の徒渉點を渡瀬といふので、浅い瀬を裳裾を掲げて渡つた、中將姫の歌に

いかにせんうつる姿はつくも髪

わが面影ははづかしの川

と歌つてゐるが、當時の徒渉を遺憾なく物語つてゐる、當時東海道の海運が猶ほ開けざる時に當つて、早く已に出羽越後方面の海運が開けたまひふのは、獨り地理上の關係のみでなく、恐らく何等か歴史上に由來する所があつたであらうこの説がある、之れ越の船路の發達につれて、我が最上川の交通も開け出羽の文化も一層進んだことであらう、平安朝以後出羽の物資は越後の蒲原の津から敦賀の津へ送り、敦賀から鹽津まで七里半の山越えをして、近江の湖水を船で滋賀の天津へ着し、逢坂山を越して京都へ送つたのである、戰國時代に至つては、山形城主最上義光が、天正八年頃最上河心の岩石が突兀して船路の通ぜざるを憂ひ、一大工事を起して舟路上下の便を謀つた、郷民其の徳を讚美したこゝが舊記に見へてゐる。

三、大石田船役所

寛文九年頃になつては、大石田に船役所を置いて最上川口輸出品の課税を定めて、之を徵集するまでに發達した。

大石田に而役物之覺

- | | | | |
|------------|------|-----|-----|
| 一青苧三拾八貫目入、 | 此役銀、 | 七匁、 | 壹駄、 |
| 一紅花三拾貫目入、 | 此役銀、 | 六匁、 | 全 |
| 一蠟漆四拾貫目入、 | 此役銀、 | 八匁、 | 全 |
| 一眞綿三拾貳貫目入、 | 此役銀、 | 八匁、 | 全 |

右者先規之通

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 一荏油、壹駄、此役丁錢百文、 | 一胡麻、壹駄、此役京錢七拾文、 |
| 一水油 全、此役京錢三拾五文、 | 一紅花、青苧、蠟漆、眞綿、 |

右者壹貫目迄無役

- 一大豆、小豆、紙、葉煙草

右四品は宿主手形に而兩人加判に而相通可申者也

之れによつて當地の産物や輸出品の税率なき、經濟狀態の一端を知ることが出来る、當時は江戸大阪の相場は一石一兩であつたが、酒田では十兩に就て米四十俵の相場であつた、酒田は米澤最上からも川船で米を下したから、その米の廉かつたこゝは想像されるのである。

四、河村瑞賢と最上川

戦國末から織豊時代を経て徳川初期にかけて、我が國民の海外に於ける活動も目さむる計りであつた、實に「海國の日本」の自然性を遺憾なく發揮した、然るに寛永十四年に幕府が鎖國の令を布いてから、雄飛の翼は折られて進取の氣象は薄らがるを得なかつた、然し海外の發展は變じて海内交通の改革に努力するこゝになつた、徳川四代將軍家綱の時に、寛文十一年河村瑞賢が幕府の命によつて、東北の沿海航路を開いたのも其の爲めである、この時最上川の航路を精密に調査し、酒田に瑞賢蔵を建て、倉庫にした、本縣史蹟調査報告に左の如く書いてある。

抑瑞軒庫なるものは、寛文十一年徳川幕府の命を帶び、天領又は御料米を稱する幕府の租米を貯藏せんが爲め、河村瑞軒が其子傳十郎と共に酒田に來り、酒井家及酒田長八等三計り港上高燥の地を卜し、東西八十三間餘南北五十三間餘の敷地に、土居を築き空濠を穿ち四方に木柵を繞らし五口の門扇を設け、下方河岸に接し各棧橋を構へ、米苞の運搬出入に

便ならしめ、之れを五河戸と稱し、一を尾花澤河戸と云ひ、御料代官之を司り、二を漆山河戸と云ひ、山形藩主之れを監し、三を寒河江河戸、四を柴橋河戸と云ひ、共に御料代官之れを司り、五を大山河戸と云ひ、庄内藩主之れを掌り、各所屬の米穀を柵内に堆積し、毎年時を計り之れを大阪江戸等の藏前に廻漕せしむ、而して貯藏の方法は地上に木材を並置し、之れを臺として米苞を積重ね、苫を覆ふて雨露を防止し、累々として堆積せる様實に壯觀なりしと云ふ、瑞軒が自ら出張して此の計畫を立てたるは奥羽海運記にも明かなるが、幕府の租米各所に散在し漕運遅延に及び、爲めに腐敗破損に歸するもの多きを以て、最上河を利用し之れを一箇所に纏め、翌年融雪の候を俟て四方に輸送せしものにして、茲に始て奥羽海運の道を開き、西廻り航路の紀元を劃するに至れり、爾後酒田と大阪との交通頻繁となり、商業大に開け此國第一の要港と稱せらるゝに至りしもの、偏に瑞軒企劃の功に歸せざるべからず。

倉庫址は今に現に酒田公園の一部に屬し、方五十間の平蕪地は倉庫址として其儘に存置してゐる、中央に瑞賢松と稱して一樹の老松亭々として茂つて居つたが、今は枯死して新たに松樹

を植えて纒に其の面影を留めてゐる、これまでは船の製作や航海の術が進歩しなかつた爲めと海上の風浪や氣候の不利のため、奥羽の米を容易に江戸へ運ぶこゝが出来なかつたが、瑞賢は之等の不備の點を整へて、酒田から東廻りして津輕海峡を通過せしめた爲めに、東北の米が江戸大阪へ盛んに行くやうになつた、従つて運賃の如きも頗る低廉になつた、享保頃は奥羽米百石に就て二十石乃至十石の運賃である、即ち十分の二若くは十分の一位であつた、この運賃を王朝時代に比べるに雲泥の差である、幕府は更らに彼れに奥羽航路の調査を命じた、此の東北邊境の地たる酒田から、北海の怒濤を越して瀬戸内海に入り、南海を経て江戸に達するといふことは容易な事ではなかつたが、遂に成功した、官糧は最上川を利用して酒田に集め、酒井氏をして之を管護せしめ、酒田袖浦に漕務場を置いて糧船を警め、海船に裝載して江戸へ向けて出帆することになつた、此の東廻り西大廻りの兩航路の開通は、漕運事業に新しい生命を與へた、我が酒田をして重要な要港たらしめたと共に、歴史地理經濟の上からも我が郷土に大影響を及ぼした事は言ふまでもない、瑞賢の功勞は實に偉大なるもので、東北文化史上忘るゝことの出来ぬ恩人である、傳ふる所によればこの當時北村山郡碁點の地に郷民相圖り頌德碑

やうなものを建立してあつたが、碑は後年洪水の爲め河底に沈没したといふ、こゝは實に惜しむべきである、近年酒田では瑞賢倉庫址に紀念碑を建て、其功績を永遠に傳へんとする計畫があるのは喜ばしいことである。

五、置賜村山兩郡間の通船

置賜郡荒砥から村山郡長崎まで通船が出来たならば、相互交通の便が甚大であらう、特に御城米運漕には此の上もない便利であらうといふので、上杉領に於ては久しい間の懸案であつた頃は元祿五年六月十日、米澤城主上杉綱憲の御用商人で京都の人西村成政同久左衛門の兩人が松川の險難を撃除し、新砥から長崎に至る舟路を新設して、運漕に便せんことを請ふた。

御私領新砥自最上長崎迄川筋難所普請仕、御領三萬石御上米御請申舟積仕度奉存候、川筋普請之願御代官所へ願申上度奉存候

一右川筋普請成就仕候ハ、米澤よりは江戸御臺所米舟積被仰付可被下置候、左様ニ御座候へハ、御米在々より直に船場出仕米澤江持參不申處、御百姓餘慶ニ可罷成奉存候事

一右川筋普請成就仕候ハ、御國へ入申鹽胴木小羽板、諸事商物舟ニ而御國入下直ニ罷成、御國の寃ニ可罷成典奉存候事

一川筋難所數ヶ所御座候へ共、普請仕様ニ願相叶候ハ、隨分取立致成就候様可仕候事

一右川筋普請之願申上、御國之御障ニも不罷成候ハ、奉願度奉存候事

右之通奉伺候、不苦於被思召者、御代官所拓植傳兵衛殿頼入、公儀向へ願可申上候以上、

元祿五年申六月 日

西村 久左衛門
西村 成政

是に於て右司相議し、之れを下流の管地者たる左澤領主酒井忠豫、及び寒河江代官小野淺之丞と商議して、工事を起さしむるこゝに一決した、こゝに置賜郡菖蒲村黒瀧の難所がある、巖石が出没し急湍激しく、舟路未だ曾て通じなかつたが、苦心努力の功を奏して、同七年九月には御上米を江戸へ輸送し得るやうになつた、之れ置賜村山兩郡間の通船の起つた權輿である、清覽録に左の記事が載つてゐる、録して參考みなす、

西村久左衛門ハ京都ノ富商ナリ、世々上杉家ノ用達ヲ命セラル、久左衛門支店ヲ米澤ニ置

キ、専ラ國産ノ青苧ヲ奈良ニ販賣スルコトヲ司ル、米澤四方皆山道路險惡、且ツ通船ノ便利ナク運送ノ不利ヲ苦ム、元祿五年支店主西村成政、米澤領荒砥ヨリ最上領長崎ニ至ル松川ノ嶮岨ヲ疏鑿シ、以テ通路ノ利ヲ起サンコトヲ謀リ、乃チ本店主久左衛門ト議シ、連署シテ之ヲ出願セリ、國老等其ノ有益ナルヲ知り、之ヲ幕府及ヒ川下沿岸ノ承諾ヲ得テ之ヲ許可ス、因テ工事ヲ創メ同七年ニ到リ始テ通船ノ便ヲ得タリ、其費金凡ソ一萬七千兩餘ト云フ、米澤領通船ノ利アル是ニ始ル、其後久左衛門私曲多キヲ以テ用達ヲ罷メラル、然レドモ其地方ノ爲ニ公益ヲ興シタルノ功蹟ハ埋却スヘカラズト云フ。

六、最上川と破船

大川ニ破船ミ、之れは免れぬ呪ひの運命である、殊に最上川は古來富士球磨の兩川ニ共に、日本三急流の一と稱せられてゐるだけに、難船も數多く、悲惨な物語りを残してゐる。一度破船の悲劇が演ぜられるミ、荷主の損害はたいしたもの、其頃の幼稚な地方の經濟界に大影響を及ぼした、それで通船に就ては上下ミも尠からず注意ミ苦心とを拂つた、今其の一例を擧

ぐるこ、元文の頃から最上川運漕船の破船が非常に多かつた、殊に寛延の末寶曆の始めに於て四拾四艘からの破船があつたので、諸荷物の流亡が夥しく、これでは荷主共が立ち行き難い云ふので、寶曆二年の春に其筋に掛合ひ、嚴重な取締法を制定した結果、破船の數もだん／＼少くなつたので安堵するこゝが出来た、然るに又々六年の秋から少なからぬ破船を見た、それで七年の三月に荷主等協議して檢視を各地に派遣し、行舟の状を視察せしむる所あつたが古口着船の船脚が甚だ沈重なるを怪しみ、停止せしめて之を検査した、果して九艘に積み送るべき荷物を七艘に過重に積載し、残りの二艘を空船として御用船へ差向けた事が判明した、一体清川から古口までの川路は兩山峻岨の處であるから、引船や竿指の働きが出来ず、帆風のみ便るのである、殊に春水の通船は最も危い所である、仍て舟子を糺問して船主の奸惡なるを知り、荷主等が之を公訴せんとして、先づ總代なる東村山郡船町の阿部孫市が書を酒田港川船方上林勇右衛門等に與へて決答を求めた事もある。荷物過重の爲めの破船は其の後も絶へなかつた、從て荷主の損害は夥しかつたのである。

文化二年新庄領富並村庄屋が、最上河岸破船の際に於ける警戒の爲め、御紋提灯の下附を代

官に請求した、それによるこゝ、最上川通富並村庄屋は三難所下で、先年から御料御城米御川下の節は、御徒目附が出張の場であるから、横山御役屋より御紋の法被も渡されて居つた、御料私領云はず御用船通船の節難破船があれば、他領入合の川通りなれば、御紋付の提灯がなくしては早速見分けがつかない、殊に當村は大郷であり、就中他所懸り合ひの用向が多い、去冬中上谷地郷の積船が準瀬で破船した時、他領の村々からも小船を乗出して寄りつき、御米取上げなごに手傳はんこ申込まれたが、そのうちには不審な者共なごもあまた見へた、此方の人足計りて間に合ふからと挨拶しても、彼等は川筋の仕來りなご、唱へて亂暴するやうなものもあつた、晝は兎に角夜分には一層苦勞するのであるから、御紋付の高張提灯壹張、弓張提灯壹張を御渡置き願ひたいこ請求に及んだが許可された、この御紋の提灯は領主を代表するものであるから絶対權力があつた、川岸には破れたる船が一艘繋かれてゐる、土堤には濡れた米俵が山と積まれて多くの民衆がそれを取り圍んでゐる、日もとつぷり暮れた頃は、御紋の提灯が高く掲げられて、御紋の法被を着た村役人は威嚴そのもの、やうなスタイルで監視してゐるのであつた。

文化九年三月、山田茂左衛門支配所村山郡村々貢米積船が、酒井左衛門尉預所田川郡千川原村地先に於て破船した、大石田村最上船方惣代が濡米並に流失米を見分し、近村の村々へ入札を觸れ出したが、千川原飛鳥兩村の商人等が之を左の直段で買請けた。

一半濡米九十九俵

此代八拾五貫三百八拾文

但壹俵ニ付五百文より糶爲登八百六十二文五分糶上

内錢貳拾貫四拾八文

御吟味ニ付糶増候分

此金拾貳兩壹歩永百貳拾五文壹分

但金壹兩ニ付六貫九百文替

一皆濡米九拾俵九升貳合五勺

此代錢六拾三貫百七拾五文

但壹俵ニ付四百文より糶爲登七百文迄糶上候分

内錢拾三貫五百三拾八文

御吟味ニ付糶詰候分

此金九兩永百五拾五文八分

但兩替右同斷

合金貳拾壹兩貳分永三拾文九分

買人共より取立上納仕候也

破船にあつた濡米は入札によつて商人等の手に渡さる、のが常であつた、右の米直段で其の

當時の經濟の一端が窺はれるであらう。

終りに特記して置かねばならぬことは、三難所に於ける破船の事である、碁點、三河の瀬、単の瀬を最上川の三難所と稱し、奔湍激流其の疾きこゝ單の飛ぶが如く、舟航最も難く、最上川を上下する舟子の常に寒心する所である。

碁點。北村山郡榎石川合流の以南、東岸鹽川村の地先である、水中に突出する許多大小の岩石が、碁子を點するに似てゐるが故にこの名がある、川を中心其幅七八間乃至二三十間、其深さ百尋長さ凡そ五六百間、兩側は悉く磐石で恰も甍の如く、磐上平水二尺に満たない、故に船は深き處を行かねばならぬから、舟子は委曲回旋する巧妙の術を盡くさねばならぬ。

三河瀬。東岸長島村の南にあつて、磐石出沒多く、淺湍で瀑布の如き者三層ある、危険な恐ろしい處である。

単の瀬。西岸富並村の地先で、川形岩礁の洲を爲す者二道二層をなし、西にビツキ岩東に黒岩屏風岩ガマ岩等有つて、奔逸の船之れに觸るれば急ち破碎するので、舟行

最も難しきする處である。

(五〇)

昔から破船の憂き目に逢つたのは此の三難所附近であつた、殊に隼の瀬は其の名の如く水勢注流の急なる隼の飛ぶが如くである、岩礁の洲をなすこゝ凡そ二百間許りであるから、船を挽て其の中流を直進せねばならぬ、若し船が一度操執を失ふ時には、百方進むこゝも亦た保持するこゝも出来ない、此の時には速に其の索を切斷して船の奔逸に任すより外に術はないのである、然らざれば索を執るの水夫も船諸共に漂没の患がある、それで基點三河瀬の難所よりも破船が多かつた、弘化三年十一月に、新庄領上谷地收納米二百五十俵を塔載せる船一艘が隼瀬で破船した、船頭水主等が代官に具申した當時の記録によるこゝ

一最上川船壹艘 舟頭 七治

但し荷ここよりとも迄五寸より壹尺位迄五ヶ所大破、其外大割へ先一丈五尺

一御米貳百五拾俵

内百五拾四俵 請米、 同三拾俵 半濡、 同六拾六俵 皆濡

こある、岩石に突き當つてあはれ破船したのである、破船はひこり三難所附近計りではなく

全流を通じて繰り返へされた悲劇であつたが、隼瀬附近には殊に多かつた、不良性を帯びた怠惰なる沿岸の者共は、鋤鎌をこつて田圃に起つこゝを厭ひ、網を引いて漁獵することを嫌ひ、徒手傍觀河岸に起つて破船あれかしこ祈つてゐた、破船は彼等に生活の資を與ふるに充分であつた、彼等は破船を見るや直ちに河下に小舟を幾艘も浮べて流米を拾ひ、流失の荷物を分捕りするのが常であつた、されば彼等は破船の多寡によつて其の年の豊凶を計るメートルとした、一年に一回巻き餅の餅なごを唱いて神前にも捧げてお祝ひをした、其の遺習が今猶ほ沿岸の村々に残つてゐる。

七、文學に現れたる最上川

溶々六十餘里に亘つて、我が郷土を縦貫する最上川！、物質的に精神的に我が郷土の文化に多大なる恩恵を寄與せるこの大川を、誰れか郷土愛を以て讚美せじに居られやうか、我等は何といふ幸福であらう、造化は活動と靜寂とを兼ねたる一大活畫圖を展開して、郷土の自然を彩つてゐるではないか、羽陽の偉人傑士も、詩人も美術家も、この秀麗な山河自然の美から生れ

(五一)

た、見よ蒨帆を擧げて舟の絶えず上下する、宛然南宗の風景畫を見るが如き心地がする、雪は鳥海山頭に白く、松は參差して河岸に青し、何等の奇景ぞ、藻江を通して見る風光は、實に天然の美を以て飾られて居るばかりでなく、實に時代の精進歴史の燻がついて居るこゝを忘れてはならない、今茲に文學に現れた最上川を説かんと欲するものも、この精進燻とを稱揚し、この絶好の風光を吾が郷土の大公園とし、大に雄風を鼓舞して質實剛健の縣民性を河畔に培養し萬古依然たる藻江の清澄を發揚させたいと思ふからである。

(1) 歌枕としての最上川

最上川の名は遠い／＼昔から響いて、稻舟を稱して多く國風に詠せられ、風雅の人の歌枕になつてゐた、古今集に載せし

もかみ川のほれは下るいな舟のいなにはあらず此月はかり

稻舟は即ちこの川を上下する小舟の謂である、色葉集に

此河は、出羽の國の館の前に流れたり、それより郡々の船に稻をつみて上るに、川の早く

て、上りてはくたり、下りては上りすれきも、つるにはのぼれば、かくよめり

之れ平安朝の昔、出羽國府に居つた官人の詠であらう、府廳の最上河邊にあつたことも想像されてゆかしい、奥儀抄に

此歌普通にはしはしはかりそそへはへる、もかみ河はたくるなくはやくて、のほる舟のかしらをふりてくたり／＼すれば、いな舟まはいふなり、つるにはのほりぬればしはしはかりそそはよめり、或物にいへり、出羽國の住人の申しは、かの川すへてはやし事なし、た、くらまの七まかりの坂のやうにて、まかくひちさりてなかれたれば、のほれる舟の又くたるやうに、よそにてはみゆるなりと申せとも、後撰に

もかみ川ふかきにあへすいな舟の心かるくもかへりけるかな

まよめり、是はさきの歌の心にてそはへる、川はさためなきものなれば、むかしは、やくこそ侍りけん

昨日の淵は今日の瀬と變るは川の習ひであるから、この最上川も昔は今よりも急流であつたらうと思はれるのである。又源重之の歌に

最上川瀧の白糸くる人のこゝによらぬはあらしこそ思ふ

最上川落ちくる瀧の白糸は山のまゆよりくるにそありける

之れ重之在國の時、稻舟なごに上りて、彼の瀧を見たのであらう、重之は兼忠の姪で、圓融院一條院の御代の人である、夫木集に

もかみ川はや瀬に過るわれ舟のと、こほるへき此よこやみる

藤原爲家

最上川たのめし舟の綱くりてこきはなれぬるゆくさきをみむ

元 輔

西行上人のゆかりなる人の、あやまちありてまいらざりけるを、ゆるし給ふへきよし奏して侍ければ、

最上川綱手ひくきもいな舟のしはしかほこはいかりおろさむ

崇徳院御製

御返事

つよくひくつなてきみせよもかみ川そのいな舟のいかりをろさて

西行法師

かく奏して侍ければほとなく御ゆるし有けるとぞ、又歌枕云右二首贈答、西行家集云、御勅當有けるものをゆるし給ふへきよし申入ける時の御製也、御返事

かく申たりければゆるし給にけりこいへり、但御製の御歌、あはれこは思ひわたれともかみ川淵をも瀬をもえこそわかたね。

もかみ川おこすう舟のみなれ竿さしはいかてはやきなるらん

俊頼朝臣

最上川鶴舟のかゝりもろこもにこかれて物をおもふころかな

法性寺入道關白

古來文人顧客が思を流れてつきぬ最上川に托し、詩や歌に感想を架説せる人が多い、今その片鱗を左に録して、千古の咏嘆を偲ぶの資料とする。

續後撰 最上川人をくたせは稻舟のかへりて沈むものこそ聞け

寂念法師

續古今 いな舟の苦引をほへ最上川しはしはかりのしくれなりけり

前内大臣

新後拾遺 いな舟も上りかねたるもかみ川しはしはかりこいつをまちけん

藤原嗣房

松葉集 最上河人の心のいな舟もしはしはかりこきはたのまむ

有 家

もかみ川瀬々にせかる、いな舟のしはしそきたにをすもかな俊 成

最上川陰こそおなしいな舟ののほれはくたる岸の青柳 雅 經

新葉集 もかみ川又いな舟のくたる瀬をしはしはかりこいか、たのまむ 師 兼

くらる山のほれはくたる我身かな最上川こく舟ならなくに

實綱

夫木

最上川いなふねのみはかよはすておりのほり猶さはくあしかも

順

最上川うきねはすれ水鳥の下の心はやすけくもなし

基俊

續千載

最上川みかさまさりて五月雨のしはしはかりも晴れぬ空かな

前關白大臣

新千載

もかみ川しはしと頼む契りたになほいな舟の遠さかりつ、

鴨祐夏

いご、しく頼まる、哉もかみ川しばしはかりのいなご見つれば

藤原相如

新後拾遺

最上川いなとこたへて稲舟のしはしはかりは心をも見む

後鳥羽院下野

もかみ川上りもやらぬ稲舟のあふ瀬すくへき程そ久しき

道因法師

歌集

もかみ川すたく螢はいな舟ののほれはくたるか、りなりけり

大江廣言

もかみ川岩うつ波にこひかひてはねしをぬれぬ三千鳥啼くなり

大納言師時

京の愛らしい盆景のやうな山水に暖かくはぐ、まれた之等の歌人が、遠い／＼出羽の名所なる最上川上れば下る稲舟を背景にして、四季の風物景趣を鑑賞した、そして壮麗な自然を強く感激し、憧憬し、讚美した、彼の自然の奥に潛む纏綿たる美を擲まうとした、彼の時代であり

がちな生の美化、生の享樂をも歌ふた、更に白沙青松の地なる袖の浦を歌枕として、自然の風物人事に對して、感じ易く動き易い情感の眼で見るこゝを免れなかつた。

夫木

しろたえの袖の浦なみよる／＼はもろこし舟は漕わたるらむ

前中納言定家

しる涙ひとりやねなむ袖のうらさわく湊はよる舟もなし

從三位家隆卿

いまはた、戀忘れ貝たね絶てひかたもしらぬ袖のうら浪

光明峰寺入道

たひ衣立よる磯の松陰にす、敷かよふ袖のうらかせ

平宣時朝臣

うた、ねの寒くもあるかなから衣袖のうらにや秋のたつらん

大納言經信卿

袖のうらにた、我やくこしほたれて舟流したる海士こそそなれ

和泉式部

そての浦の色の濱はなりぬこも何のかひかはあらんこそすらむ

伊勢

しきりつ、涙のか、る袖のうらに忘れ貝をはひろはさりけり

中務

君こふる涙のか、る袖のうらは岩ほなりこそ朽そしぬへき

よみ人しらす

拾遺

磯なつむ入江の浪にたちかへり君見るまでの命こそかな

平康貞女

なかるする海士のしわさとみるからに袖のうらにもみつ泪かな

むすめ

新古今

袖の浦の浪吹返す秋風に雲の上まで冷しかるらむ

中務

浪にたにぬれすほすまはありそ海の釣する海士の袖のうら風

忠定

新勅撰

憂しきおもふ物からぬる・袖の浦ひたりみきりに浪や立らん

前關白

續後撰

ほしわひぬ海士のかるもに鹽たれて我からか・るそてのうらなみ俊成卿

藤原通憲

續古今

君戀ふる涙は海となりぬれさみるめかはらぬ袖のうらかな

參議雅經

續拾遺

けふよりや人に心もおきつ浪かけてもしらぬ袖のうらかな

常盤井入道

新後撰

歎かした袖の浦浪立かへりおもへは憂も契り成けり

高階宗成

家集

袖の浦湊入江のみをつくし朽ちすは猶やうき名立らむ

祝部成茂

山家集

我身こそ心にしみて袖のうらひる時もなくあわれなるかな

小町

類聚

なかめする空にもあらてしくる・は袖のうらにも浪は立らん

齊宮

玉吟

いにしへのなきになかる・水くきは跡こそ袖の浦によりけれ

西行法師

拾遺愚草

袖の浦たまたぬ玉の砕けつ・よせてもちかくかへる涙かな

定家卿

類聚

しはしたにゆきてまかえん袖の浦潮みつしほのひるま待きも

家隆卿

類聚

人しれぬ袖の浦には浪かけていはての關に日數へにけん

如覺

類聚

朽はてし契の床のかたしきになをほしわふる袖のうらなみ

俊成卿

類聚

袖のうらに浪よせかくる宵々やわか・たしきの涙なるらん

兵衛内侍

類聚

夜き・もに忍ふ心のあらはれてたえずそか・るそてのうらなみ

範宗

類聚

物おもへはいき・ひかたき袖のうらの涙に月そくる・かほなる

行宗

類聚

きぬくゝにわかる・袖の浦千鳥猶ありあけは音になかれける

爲家

類聚

五月雨に煙たえてもあま人の猶しほたる・袖の浦波

祝部成賢

類聚

徒らに立つ名もくるし蟹のかる見るめはよその袖の浦波

前參議雅有

類聚

あま衣ぬれそふ袖のうら見てもみるめなきさにもしほたれつ・

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

類聚

しらせはやみるめはからて朝夕に波こそ袖のうらみありとも

爲道朝臣

くちぬれば袖の浦浪かけてたに人を見る目は頼みなければ

從三位親子

年月のあはぬつらさをかさねてもなほ立歸へる袖の浦波

龜山院御製

新千載

も鹽くむ袖の浦風寒ければほさても蚤や衣うつらむ

藤原宗泰

新拾遺

しらせはやかにそめなりし見るめよりたえすそかゝる袖の浦波

權大納言公忠

新拾遺

船さめて片しく袖のうら風をたゆたふ波の枕にそきく

法印源意

新後拾遺

春來ぬミ霞の衣たちしよりまこほにかゝる袖の浦波

前大納言爲兼

新後拾遺

渡つ海のそこもしらぬ蚤なれミ漢汐の烟たゝは尋ねむ

御選

新後拾遺

みるめなき鹽のみたるゝ蚤なれば袖のうらにそ尋ねても見む

讀人しらす

新後拾遺

曉の別れはいつもから衣ぬれてそかゝる袖の浦波

從三位爲信

新續古今

忍びかね鹽干もしらぬ波の音を猶明よする袖の浦風

正三位知家

新續古今

夢にたに見るめもなく明る夜の返す衣の袖の浦浪

同院攝政前左大臣

新續古今

立歸りあふ夜まで猶ほさて見よ別れしまゝの袖の浦波

源家長

新續古今

あまころも猶いかならん鹽くまぬ身にたにぬるゝ袖の浦波

按察使資明

あま人の玉藻かりほす袖のうらに我立ちぬれぬ浪のよるく

彈正尹平忠房

こへかきな涙の床にふしわふる我かた敷の袖の浦浪

進子内親王

あま人の衣ほすまも白雲のつもればかゝる袖のうら波

一條前太政大臣

新葉

里の蚤の袖の浦風のミかにていさりにくたす春の夕風

權大納言經豊

新葉

かくも多くの歌人が、思ひくの感想を袖の浦に寄せて歌ふた、袖の浦は出羽の名所にして

御製

その名高く、風雅の人の歌枕ミなつた、これらの古歌に現はれた山紫水明の自然を味ひ、其の胸に秘められた思想の琴線に觸れる時、魂は遠く飛んで千古の月影に馳せ、身はさながら白沙青松の長汀曲浦、寄せては返へす袖のうら波に、歌人ならぬ我が身ながらも、心ゆくまで詩趣に味到したいやうな氣分がする。

(2) 源義經の北國落と最上川

時は文治二年の二月、暫らく吉野に置いて、天下の形勢を瞰望してゐた英雄九郎判官義經は

身を羽黒山伏に粧ひ、主従二十有餘人世を忍んでの北國落、越中安宅の關で關守富樫に誰何され、漂泊轆轤幾度か危地に出入し、漸く我が念珠が關に差ししかつたが、關守きびしくて通るべきやうもない、武藏坊辨慶一策を案じて、

判官をば下種山伏に作りなし、二挺の笈を嵩高に持たせ奉り、辨慶大の楯杖につき、歩めや法師きて、しと、打ちて行きければ、關守共これを見て、何事の咎にて、それほごにさいなみ給ふに申しければ、辨慶答へけるは、これは熊野の山伏にて候ふが、これに候ふ山伏は、子々相傳のものにて候ふが、彼奴を失うて候ひつるに、此程見つけて候ふ間、いかなる咎をも當て、くれうず候、誰か咎め給ふべきとて、いよくひまなく打ちてぞ通りける。

關守ごも之れを見て少しも怪しまず木戸を開けて通した、いよく出羽の國に入つて、其の日ははらかい云ふ所に一泊した、明くれば笠取山を越えて三瀬の薬師堂に參籠した、こゝにて田川郡の領主田川太郎實房の爲に御祈りして、少年の身にまつはる悪靈を拂ひなごした、大泉の庄大梵寺を通つて、羽黒の御山をよそながら拜して、流れも清き清川に着いた、義經記に

やがて御船に乗り給ひて、清河の船頭をいや權の頭とぞ申す、御船支度して參せるける、水上は雪しる水嵩まりて、御舟を上げかねてぞありける、これや此の春、千種の少將、しやうのさらしまさいふ所に流されて、「月影のみ寄するは、たなかい河の水、いな舟のいつらしかは、最上河のはやし瀬ぞ、ことも知らぬひはの聲、霞のひまに紛れる」と歌ひしも、今こそ思ひ知られけれ、かくて御舟を上する程に、山頂より落ちたきる瀧あり、北の方、これをば何の瀧さいふぞと問ひ給へば、白絲の瀧と申しければ、北の方かくぞつ、け給ふ。

最上河せ、の岩波せきとめよ寄らてぞ通るしらいこのたき

もがみかは岩越す波に月さえてよるおもしろき白絲のたき

こ口ずさみつ、、鎧の明神、冑の明神拜み參らせて、たかやりのせみ申す難所を上げ煩ひておはする所に、上の山の端に猿の聲のしけ、れば、北の方かくぞつ、け給ひける。

ひきまはすうちは、弓にあらねきもたかやり猿をいてみつるかな

岩越す波に月さえて、一練の白糸山峽に懸れるの興趣は盡きざれき、寄るべなき身を如何に

せん、況んや夜深うして猿の聲啼いて絶たざるの幽境、不遇を孤舟に托するの身は之れ落人の女性、そ、ろに哀感を覺えて長嘆したであらう、又

かくてさし上せ給ふ程に、みるたから、たけくらべの杉なきいふ所を見給ひて、やむけの大明神を伏拜み奉り、あい河の津に付給ふ、判官、寄道は二日なるが、湊にかゝりては三日にまはる道にて候ふに、龜割山を越えて、へむらの里、あねはの松へ出では直ぐに候、いづれをか御覽じて通らせ給ふべきに仰せられければ、名所々々を見たけれども、一日も近く候ふなれば、龜割山に懸りてこそ行かめとて、龜割山へぞかゝり給ひける。

八向の大明神を伏し拜み、合海の津に船を繋いで、新庄から鳥越舟形を経て、小國川の流域に沿うて東し、龜割山の山間にさしかつた、偶々其の夫人が産氣がついて玉のやうな一男を擧げた。辨慶は直ちに谿谷の間に下り、行々水源を探ねたが、烟霧朦朧にして咫尺を辨じない白露深き所石間に聲がある。沸々として沫を吐く、鐵を揮て之を碎けば温泉滾々として噴湧した。之を分娩兒の産湯に供した、これ今の瀬見温泉であるに傳へられてゐる、義經の北國落に於ける通路に就ては、昔から多くの人々によつて論議された、我が郷土に於ても義經辨慶なき

に關する傳説が頗る多い、辨慶の笈に傳稱するものも其の數十數個に及んでゐる、義經の微行は其の當時既に不明である、數百年の星霜を關みした今日、何れも定め難いのは當然である、云はねばならぬ、然し尿前越即ち中山越は東西必由の一路でもあり、又各地方の傳説を總合して考へて見ても、之れによつて遁れたを見る方が穩當ではあるまいか。

義經に最上川、何と云ふ好恰なコントラストであらう、然も落人としての古英雄が、清川の清峽に孤舟を浮べて將來活躍の夢を結び、花の如き夫人が而も男装して世を忍びながらも、自然の風光を恣にし歌韻盡きざるに至つては、之れ一篇の活詩にあらずして何んであらうか、一幅の活畫にあらずして何んであらうか、彼は絶世の勇者であつた。然るに事志と違る奥州平泉に於て果敢ない最後を遂げたのは、そ、ろ一掬の涙を禁じ得ない。然しながら彼の人物の聲價は生前に縮められたが死後に於て大に伸びた。彼が一生のうち最も逆境に起つた悲劇の一頁を我が郷土史上に残した。

(3) 聖僧澤庵と最上川

最上川早瀬に月も流されてしはし浮世にすむかひもなし

之れ聖僧澤庵が、上山の配所に於て詠ぜられた國詩である。天上高く澄み渡る月にはあれごその清き影は最上川の早瀬に流されて、住むかひもなき浮世となつた。

おもひきや今宵の月をみちのくのあこやの松のかけに見んこは

師は如何なれば今宵のこの月を、阿古耶の松の木蔭に見ねばならなかつたらうか、思ふに寛永四年大徳寺住持義峰が退隠したが、後住に關して議論があつた、澤庵等正隠を推して住持たらしめた、古例に依つて紫衣を賜ふた、然るに翌五年幕府は正隠の開堂を以て法度に違ふものみなし、京師の所司代に命じて嚴責せしめた、一山の衆徒大に恐怖して爲す所を知らなかつた師百方辨解したが聽されない、六年遂に幕府は師及び玉室江月等を江戸に召して詰問し、七月廿五日に至り玉室を陸奥の棚倉に、師を出羽の上山に配流し、城主土岐頼行をして之を監視せしむる事となつたのである、八月十五日師の上山に到るや歌ふて曰く

元是清光私照無 巴陵日本洞庭湖 今宵可思十分影 月亦明天鼓器圖。

都にあらば日本の洞庭湖とも云ふべき琵琶の湖心にうつる月影を、心行くまで眺めんものを

今配所にありてそれもならずこ感慨極まる所を知らなかつた、師は四年の間松山の小丘に庵を結んで、自ら春雨の二字を刻して額を一室に掲げ春雨庵と號した、松山は溪流を夾んで月岡城に對し、丘上一帯松樹影暗く、谿水滾々として流れ盡きず、一仙境を劃してゐる、師は花鳥風に四季をりくの吟詠を絶たなかつた、殊に春雨の清寂を味ふた。

おもひねて昔忘れぬさよ枕夢路つゆけきまごのはるさめ

花にぬる胡蝶のゆめをさまさしこふるも音せぬ軒の春雨

散る花を惜むなみたか入相の聲もうるほふ春さめのそら

谷川の音にまきれて春雨のふるこは軒のしづくにそしる

苔あつき草の庵の春雨はしづくにたにもふるこ知られず

昔忘れぬさよ枕、夢路露けき春雨の庵に、波風荒き浮世をよそにして、閑に茶を煮て法義を談じ、筆畫俳諧を楽しんだ、壁書こして傳ふ所によれば、

飯は何のために喰ふものぞ、ひだるきやめんためにくふものか、ひだるき事なくばくはていらざるものか、さうかさて候。しかるに、そへものなくては飯はくはれぬこみな人のい

ふぞ僻事なる、ひこへにひだるきこめんためのはかりごこ也、役にくふめしにはあらず、
そへものなくて飯のくはれぬは、いまた飢の來らざるなり、うゑ來らずば一生もくはてあ
らん、もしうゑきたらばその時において糟糠をもえらぶべからず、況んやめしにおいてを
や、なにのそへものかいらん、受食如服藥せよこほとけも遺教し給ひしなり、衣類も亦
かくのごとし、人は衣食住の三にこそ一生をくるしむれ、此の心あるよりわれは三つのく
るしみうすし。

流石に一山の開祖たる高僧の格言である、師は城主土岐頼行の寛容なる待遇に、囚はれの身
を忘れて陸奥の松島にも遊んで、遊覽の興をつくして還つたこもあつた、彼の有名な劍師新
蔭流の祖柳生但馬守宗矩の歸依も厚く、師は物に動ぜぬ心法の極意を宗矩に授けた、宗矩は大
獻公の武技の師である、或時公に言つて曰く「劍を學ぶ者當さに心を靜むべし、心を靜むる宜
しく識者に訊るべし」こ、公問うて曰く、如今識者誰れをか爲す、宗矩答へて曰く、臣の識る
所を擧ぐれば、宗彭に若くものなしと、茲に於て乃ち澤庵の罪を赦して江戸に召還した、後將
軍家光は品川に東海寺を建立して、師を招じてその開山した、後京師に上り上皇の勅を拜し

て宗要を説く所あつたが、正保二年七十三歳で東海寺に示寂せられた、あはれ春雨庵の遺蹟今
は唯た名のみで、禪師が嘗て配所の山の井云ふ題にて

淺くこもよしや又汲む人もあらはわれにここなる山の井の水

こ歌つた滾々こしてつきぬ春雨の井のみ、今猶ほ昔を語つてゐる。

(4) 俳聖芭蕉と最上川

さみたれを集めて早し最上川

之れは俳聖芭蕉によりて高唱された名吟である、豪奢な趣味を愛して現世の享樂を讚美した
元祿時代に居つて、ひこり閑寂の世界に逍遙した蕉翁は、一笠一杖、門人曾良を伴ひて奥羽行
脚の途に上つた、平泉に藤原氏三代の榮華の夢の跡を辿つて、

夏草やつはものごもが夢の跡

五月雨のふり残してや光堂

生い茂る夏草に涙を濺ぎ、金碧燦爛たりし金色堂の頽廢を嘆き、忽ち道を轉じて

高山森々として、一鳥聲聞かず。木の下の闇茂りあひて夜行くが如し。雲端につちふる心地して、篠の中踏みわけく、水をわたり、岩に蹶きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。

尿前越の深山幽谷を踏破して、我が最上郡の新庄に出たのである、この地の俳人風流孤松柳風木端等と相會して俳筵を開いて

水の奥氷室尋ぬる柳かな

風の香も南に近し最上川

なごの句を残されて、尾花澤の清風を訪ねた。

かれは富めるものなれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日頃ミ、めて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我が宿にしてねまるなり

這出てよかひやが下のひきの聲

眉掃を俤にして紅紛の花

蠶飼する人は古代のすがたかな

曾良

旅に疲れた蕉翁は、門人清風の家の旅装を解いた、餘り涼しいので人の家たる事も忘れ、自分の家のやうな気がして、手足ものびく寝をべつてゐる、そして養蠶室の床下に鳴いてゐる蟻蝻に思ひを寄せて、隠れてゐないで出て鳴いてはさうだと歌ひ、最上名産の紅花を捉ひ來つて詠み、曾良は又、筒袖を着た素朴な姿の古代めいたことを寫生してゐる、何れも郷土趣味が現はれて面白い、「富んでゐるながら上品な清風」は、一体どんな人であつたらうか。

姓は鈴木、名道祐、通稱八右衛門、俳號を清風といつた、紅花商で家號を島田屋といつて尾花澤の富家であつた、最上の紅花大臣といへば、誰れ知らぬものも無い位名が響いて居た、貞享三年になれる其撰「一橋」に、芭蕉、其角、嵐雪、才麿、曾良なごの連句を載せてゐるを見れば、江戸の俳壇でも知名な人で、芭蕉は舊知の仲で、師弟の間柄であつた大淀三千風の「行脚文集」、貞享三年九月尾花澤に來た時の條に

當所には予が好身あまたあれば、三十餘日休らひ、當所の俳仙鈴木清風は古友なりし故訪ひしに、都櫻に鞭したまひ、未だ關を越えざりしミなん、本意なみながら一紙を残す

駕籠千里白河のみや時雨るらん

(七)

こあれば、清風は留守であつた見え、尾花澤の清風、大石田の一榮なきは、當時地方
俳壇の曉將て新界の牛耳をこつてゐたのであらう、著書としては「一橋」の外「いなむし
ろ」「おくれ双六」等がある、享保六年正月十二日歿す、辭世の句に曰く、

本來の磁石を知るや春の雁

鈴木家は今猶ほ現存してゐる、俳書、名家の書簡、遺稿等多くあつたが、回祿の災にあつ
て全部焼失し、今は唯た一葉の短冊「袂紙花橋のむかしかな」の句のみ残つてゐる、

芭蕉は尾花澤から最上川を下つて、羽黒へ出るつもりであつたが、山寺の名蹟を探る爲に、
わざわざ山形の方へ歩みを進めた、

山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよ
し人々のすゝむるによりて、尾花澤よりこつてかへし、其の間七里ばかりなり、日いまた
暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり
土石老いて苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず。岸をめぐり岩を這うて佛閣

を拜し、佳景寂莫にして心すみゆくのみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

何といふ閑寂な詩趣であらう、蟬の聲がしん／＼と降りそゞいで、岩の肌に浸みこむやうな
寂莫の感じが深刻に胸をさすのである、やがて最上川を舟で下らうと思つて、大石田の津に晴
天を待つてゐた。

こゝに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の音をしたり、蘆角一聲の心をやはらげ、此の道
にさぐりあしゝて、新古ふた道にふみまよふといへきも、道しるべする人しなればこゝ、
わりなき一卷を残しぬ、このたびの風流こゝに至れり。

蕉翁は、此處の俳人達が、貞門、談林の舊派と、正風の一派との二つの俳風に迷つてゐるか
ら、指導して頂きたいと云はれたので、高野一榮の宅で俳諧を催ふした、そして左の五月雨の
一卷を残した。

さみたれをあつめてすゞしもかみ川

芭蕉

岸にほたるを繋く舟杭

一榮

(三七)

瓜はたけいさよふ空に影まちて
 里をむかひに桑のほそみち
 うしのこにこゝろなくさむゆふまくれ
 水雲重しふところの吟
 ♪ 佗笠をまくらに立て、やまおろし
 松むすびをく國のさかひめ
 永樂の古き寺領を戴て
 夢さあはする大鷹のかみ
 たきもの、名を曉さかこちたる
 つま紅粉うつる双六のいし
 巻あくる簾にちこのはひ入て
 煩ふひみに告るあきかせ
 水替る井手の月こそ哀なれ

曾良 川水 一榮 芭蕉 川水 曾良 一榮 芭蕉 川水 曾良 一榮 芭蕉 川水 曾良 一榮 芭蕉 川水

きぬたうちきてえらひ出さる
 花の後はなを織らする花庭
 ねはむいみなむ山かげの塔
 穢多村はうきよの外の春富みて
 かたなかりする甲斐の一亂
 葎垣人も通らぬ關所
 もの書たひに削るまつかせ
 星祭る髪はしらがのかがるまで
 集に遊女の名をとむる月
 鹿笛にもらふもおかし塗あした
 柴賣に出て家路わする、
 ねふた咲木蔭を畫のかけろひに
 たえくならず千日のかね

曾良 一榮 川水 芭蕉 曾良 一榮 川水 曾良 一榮 芭蕉 曾良 一榮 芭蕉 川水 曾良 一榮 芭蕉 川水

古里の友かこ跡をふりかへり

川 水

こころは論する舟の乗合

一 榮

雪みそれ師走の市の名残こて

曾 良

煤掃の日を草庵の客

芭 蕉

なき人を古き懐紙にかそへられ

一 榮

やもめからすのまよふ入逢

川 水

平包あすもこゆへき峯の花

芭 蕉

山田の種をいはふむらさめ

曾 良

芭 蕉 九

一 榮 九

曾 良 九

川 水 九

最上のほこり一榮子宅におるて興行

元祿二年仲夏末

芭蕉庵桃青書

この歌仙は現今大石田町の佐藤茂兵衛氏が所蔵されてゐる、又同町西光寺に句碑がある、之れは芭蕉自筆の句を刻したものだ。傳へられてゐる、やがて芭蕉は梅雨の晴間に最上川を下つて、清川峡流の奇勝に胸を躍らした、東西の山脚相迫つて、川は純然たる大河の趣をなし、水は溶々として深潭をなしてゐる、兩岸の蒼翠は時々旅人の衣を襲ふたであらう。

最上川はみちのくより出て、山形を水上をす。ごてん、はやぶさなき云ふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟をくだす。これに稻積みたるをやいなぶね云ふならし。白糸の瀧は青葉のひま／＼に落ちて、仙人堂岩に臨みて立つ。水みなぎつて舟あやふし。

さみだれを集めてはやし最上川

庭帆をあげて上下する小舟、青葉がくれに見える楚々たる白絲の嬌姿、岸邊にたてる仙人堂の風致も添えて、一段の興味を呼んだであらう、それに雨餘の大河激流漲りて水烟あがり、岩をも碎き山をも劈かん光景に、詩神そゞろに動き來つて、「集めて早し」なる凄壯の句を成した

のであらう、六月三日、羽黒山にのぼつた、門人圖司呂丸を訪ね、羽黒の別當代會覺阿闍梨にも會つた、南谷にある別院に一泊したが、阿闍梨は懇ろにいたはつてくれた、四日、本坊で俳遊を催した。

有りがたや雪をかをらす南谷

董風がそよ／＼吹いて、谷間の雪もかほるかと思はれて、この靈地の有り難さが身にしみた幽寂な感じを現はしてゐる、五日、羽黒權現に參詣して、天台止觀の月、圓頓融通の法の灯に閑寂を味到した翁は畢竟閑寂な自然詩人であつた、都會よりは田園、野の家よりも山居を愛した、彼が愛した趣味は一種の寂びであつて、豪華な趣致ではなかつた、八日には雲霧山氣の中を未だ消え残る氷雪を踏んで登るこゝ八里、峻しい山路に息はきれ、寒さに身はこゝえて漸く頂上に至れば、夕日は已に没して月が出た、篋を敷き蓆を枕し一夜を明かして湯殿山へ下つた。

岩に腰かけてしばしやすらふほご、三尺ばかりなる櫻のつぼみ、半ばひらけるあり、ふり積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遅櫻の花の心わりなし。

雪の下に埋れても、なほ春の時節を忘れない花の心に、生の一脈の活動を認め、大僧正行尊が詠んだ

もろこもにあはれこ思へ山櫻

花よりほかにしる人もなし

の歌の情趣を味つた、坊に歸るこ、河闍梨の需めに應じて、水莖の跡もゆたかに、三山巡禮の句を短冊に書き流した。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢踏む道の泪かな

同行の曾良はまた左の三句を残した。

月山や鍛冶が跡こふ雪清水

錢踏んで世を忘れけり湯殿道

三日月や雪にしらせし雲の峰

羽黒を立つて、鶴岡の長山重行の家に迎へられて、俳諧一卷を催した、赤川を舟に乗つて酒田の港に下り、伊藤不玉の家に宿つた。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

酒田には四五日滞在した、近江屋志玉亭で納涼の佳興に瓜をもてなして、發句を乞うた、そして句なきものは食ふこもが出来ない戯れたのも、旅のつれづれを慰むる餘興であつた。

はつ真桑よつにや割らん輪にやせん

初瓜やかふり廻しを思ひ出づ

三人の中に翁やはつ真桑

興さめて心もこなし瓜の味

曾良

不玉

志玉

蕉翁はいたる所江山水陸の風光を賞した、「三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて」旅の始めに云つてゐる如く、松島への憧憬は強かつた、その松島も見た、藤原三代の榮

耀の夢の跡も辿つた、今残る所は象潟の奇勝のみである、翁は、風強くして砂塵を飛ばす海道を山を越え、磯を傳ひ、真砂を踏んで雨の象潟を見た、雨の象潟はうす暗くさびしくて、恰も憂愁の色深く眠るが如き美人西施の姿を想はせた、その雨の中には合歡の花がうすぼんやり咲いてゐる。

象潟や雨に西施がねぶの花

の名句を残した、笑ふが如き松島も、啼くが如き象潟もは翁の心の琴線に強く響かざるを得なかつた、太平洋海岸の明るい感じも、裏日本海岸の暗い感じもは、しみぐ詩心を刺撃した、然し翁はさこまでも悲壯幽寂の自然美を愛した、翁は酒田の俳人等に引止められ袂を分ちかねたが、愛を割いて鼠が關を越え越後路に歩を進めた。

翁は旅から旅への生活のうちに、眞實に自然を観た、蟬の聲に山寺の幽寂を味ひ、湯殿山上の雪に埋れた遅櫻にも情趣を感じた、そして活動も静寂も兼ねた我が最上川は、翁の靈筆によつて新しい生命を與へられた。

五月雨を集めて早し最上川

この詩人の眼にはつきり映つた最上川の自然の姿は、多くの歌人も見得なかつた天地であつた、翁は自然の根柢に横はつてゐる最上川の眞生命を遺憾なく把握した、翁は自然の奥底から流る、生命の泉を掬みつくさんとした、奥の細道は、多くの旅行者が持つやうな唯た一篇の記録ではない、生命のある詩、立派な藝術品である。翁は生命を此の作にうちこんでゐる、あゝ、恵まれたる我が最上川！、この俳聖芭蕉によつて高唱せられた山水の美は、之れ我が郷土の誇り云はねばならぬ。

(5) 旅人と最上川

旅人よ、私は冀ふ、御身達はすべて空虚でありたいと、四角張つた理屈の袂をぬぎ捨て、涼しい風に吹かる、やうな氣持で、旅をして見たいと私はいつも思つてゐる、記行文の如きものも、偽らず彩らず、見たま、感じたま、を、純な心で卒直に書きあらはす所に、不言の妙味がある、そして何物をも入れる廣い心と、旅の困苦にうちかつ勇猛心とが大切だと思ふ。旅人芭蕉は、烟霞の僻、漂泊の思ひやむ時なく、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、

一生を旅に暮らした、私は我が郷土に深く印した旅人芭蕉の足跡を辿つて見た、旅行の趣味は人生の一大快事である、徒然草の法師は

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ、そのわたり爰かしこ見ありき、るなかびたる所、山里なきは、いじめなれぬ事のみぞおほかる。
 ミ旅行の趣味を説いてゐる、そして

最上川はやくぞまさる雨雲の

のほれはくたる五月雨のころ

五月雨に水嵩まして、雨雲の山河を覆へる中を、小舟のあまた上下する有様を歌つてゐる。芭蕉の詠んだ「集めて早し」の句も、此の歌から換骨奪胎したのであらう、而も巧を弄して却て纖柔に落ちない所に、芭蕉の強味がある、又我が郷土の生んだ米澤の大橋乙羽は、明治文壇に於ける山河巡禮者の明星である、其の著「千山萬水」のはしがきに

西行法師の繪に、笠ミ杖ミを放したるは少く、芭蕉翁の像は、旅仕度の儘なるが多し、されば光陰は百代の過客、天地は萬物の安籠、生老病苦は合アイの宿シユクにて、世は一六の賽の目の

上り坂あれば、下り坂ある、道中わづか五十年、東海道廻双六から、振出してトの風の袋フクロを引き、餘れるを一ツ振つて、人を追ひ越したのが、下から親方オヤジ立てられて、駕籠カゴならば乗客ノリダテ、昇ぐ男は雲助クモノタケの、毛臈モウラツにソヨミ秋の風フユ、細かい所に目を着ける俳諧師ハイゲイシも、物の哀を知るは旅ならずや。

旅を人生に寄せてゐる、然り人生は旅だ、咲き誇る花に對しては、うら若き人生の朝を思ひ落葉を照らす月影に對しては、老いゆく人生の夕を想ふなき、旅なればこそ一しほ感ずるのである、故郷遠き草の枕に、除ろに哀感を覺ゆるのも旅である、詩人藤村は

落葉松カハヤシの樹はありても、石南花シユクナギの花さくとも、故郷遠き草枕、思はなにか慰まむ。

旅寢は胸ムネに病むばかり、沈む憂は酔ふがごと、獨りねる夜の夢にのみ、たゞ夢にのみ山路を下る。

ミ旅人の哀愁を歌ふた、されど旅人は幸福なる漂泊者である、泰西の詩人キーツは歌ふ。

歌ひつゝ、來往し、醒めたる眼を以て有らゆる光景を眺め、耳を聳て、有らゆる音響の美を聆き、自然界の玄妙を愛玩熟知す。

旅は曇れる眼に光りを與ひ、潤れたる心に新らしき泉を與へる、可愛子には旅をさせよこは昔から云つた言葉である、憂いもつらさも、おそろしき事、をかきこき、人の心も言葉つきも、國により所により異なる様を、深刻に知るは旅である、西行の笠をしめつけ、宗祇の草鞋の跡を慕つて、こゝの名所かしこの山水サンスイ、南船北馬筆を載せて、千山萬水の風光を探る文人墨客が、如何に我が最上川を見たであらうか、それらの人々の眼に映じた自然シヤク、心に盡いた我が郷土とを、筆の筆の跡を辿つて、この一篇を書いて見たい。

最上川のうちに最も旅人の眼を喜ばし、詩魂を奪うたのはさうしても清川の清峽であつた、「陸奥千鳥」の桃隣は、

こゝこそかの最上川、聞き及びたるよりも川幅廣く、水早し、左右の山つゝきに瀧あまたあり、中にも白糸の瀧けしきすくれたり。

ミ讚嘆した、多くの旅人は、大石田から下つて、なぎ澤、清水、古口、清川、この船關を経たものである、平凡な平面的な風致から、だん／＼非凡な立體的な畫面を廣げて行く、そして

みじか夜を二十里寝たり最上川

の名句を詠んでゐる、何といふ餘韻の深い句だらう、雄大な自然の懷ろに抱かれながら、孤舟夢を載せて急流を下るの風流である、「大八州遊紀」に

發大石田、赴清川、清水距北十六里、乘船同乗者七八人、蓬下蹲居、下川二里、天明寒甚不敢出頭、日高始出立舷上、兩岸層巒複嶺、陂陁不斷、秋樹經霜、猩紅映日、翠杉青松、粧點其巒、龍田紅楓世之所稱、未知孰伯仲、川流屈折、繞山而流、遙望唯視高巒聳天、水勢如窮忽又渺漫無涯、柳子厚所謂、舟行如窮忽又無際者、范成大嘗履其地云、碧流淙淙不可杭、春漲或可杭、然則子厚語之妙、實不知其境也、至合海村、有崖色白如雪、側立千尺紅澗翠蔓、掩映其上、猶如一大絹上畫秋樹紅葉、真可稱奇絕、至他則其色稍帶紫黃、唯比崖樹般紅如火、不知何故、下合海數里、有白絲瀑布、紅樹隱映亦可愛、夕至清川驛。

川流屈折山を繞つて流る、所、兩岸の紅楓水に映じて美なるの光景を、筆端に躍らしてゐる詩人正岡子規は、霧降りかゝる秋の朝、莖帆をか、げて下つた。

あさ霧や四十八瀧下り舟

壯美な清峽は、遺憾なくレンズの燒點に觸れてゐる、四十八瀧の音のみ聞えて姿の見えぬの

も多くあつたらう、又少年時代に我が郷土の山河にはぐ、まれた田山花袋翁は、其の著「最上川」に

路上の石に車の輪の轆れるに愕然として驚き覺れば、何時の間にか狩川の驛は過ぎて、湯するばかりに遠く望み來りし清川附近の山翠は、既に早くも眼前咫尺の間にあり。ことに綠葉の山嵐に搖曳せる、俄かに別天地に入りたるか如きを覺ゆるに、われは喜ぶこゝ一方ならず、今までの苦熱も全く忘れ果て、一意その清く冷かなる空氣を吸ひぬ。美しき清川の驛に近く、路は風情ある松原にかゝりて、その盡くる所に初めて最上川の溶々たる流を見たる時、わが心は如何に躍りわが胸は如何に震ひし。更に、驛の旅亭に至るに及びてわが心は愈々動きぬ。見よ、この驛の如何に古風の趣を備へたるかを、見よ、この驛の如何に名所圖繪中の旅舎に似たるかを。

朴訥な、そして無限の誠實の口をこめた主婦に導かれて二階に上つた、前山の翠微は限りなき涼味を送つてくる。茶を喫しながらあたりを見た、前にははちすの花咲ける櫃があつて、桔槔が高くあがつてゐる、彼方の家には、赤い襷を十文字に綾取つた十七八歳の少女が後向にな

つて、頻りに雪よりも白い絲を繰つてゐる、をり／＼清く玉の如き唄聲がきこえる、翁は

驛路の最後の家を過ぎ、面白き形したる松原をも越れば、兩山の間を流れたる溶々たる最上川の流は、深碧なる水をわが前にた、えて、をり／＼激する水聲は恰も遠笛を聞くが如し。何等の奇景ぞ、われは最上川をかくまで卓れたる河流は夢にも想像したる事なかりき、路はその川の右岸を縫ひて、山岳の屈曲、翠嵐の搖曳、殊にその山勢の迫りて迫まらざる。その河身の深くして溶々たる、最もわれの心を惹きぬ。われ、天下を漫遊して、山川の美を觀るこゝ甚だ多し。されどわが日本の地勢の狭少なる爲めか、未だ山中を流れて然も溶々たる大河の趣きを爲したるものあるを知らず。富士川の壯、熊野川の奇、孰れも優に天下の奇景たるに足るこゝ雖も、然も兩岸の水漲溢して溶々船を泛ぶるに足るの景に至つては、遂に大陸の一小流にだも及ばず。常に似て憾みなせしに、今この東奥の僻地にゆくりなく最上川の一景を得て、以てわが多年の渴を醫すを得たるは豈喜ぶべきの限りにあらずや説き去り説き來つて、この隠れたる奥北の最上川の奇景を讚美した、又乙羽は酒田から清川を経て、本合海の漁村に一泊した、「千山萬水」に

酒田の町を離れて、葭茂れる廣野あり、葉は枯れ盡して、黄なる花の風に靡く間より、鳥海の山は白く見えぬ、最上川の海のやうになれるに架せる橋を渡りて、また幾村かを過ぎ清川に着きて晝餐した、む、こゝよりは始終川に沿ふて、山の腰をめくり行くに、青き山と赤き山との間を、流る、大河は、幾日の雨を湛えしか、滔々として矢よりも疾し、古口にて日は落ちたり、莖帆張りて江を下れる舟の、蘆荻の洲に泊るも妙に、これは楓橋の夜泊るべき宿の遠く、月無く鳥の歸へる山の根に行き暮れて、對岸の古寺に鐘の聲も寂びたり。見る／＼青松と紅葉と、蒼然たる色に裏まれて漁家二三點、宵闇になり行くも、物哀れならずや、本合海は江に近き漁村なり、蟹家立並びて、戸を洩る火影の淋しげなる、只ある宿屋に入りて、わづかに一夜を明しぬ。詩あり。

峰巒中斷大江流、紅樹青山滿目秋、三十六灣行不盡、一帆夜泊荻花洲。

最上河畔に夜泊して、蟹家の戸をもる火影に、旅の哀愁を感じたであらう、末松青萍は嘗て最上川を下つて、絶壁を奔瀨し、盤旋盡きざるの光景を歌ひ、更らに清川の津に舟を繋いで、幕末の志士清川八郎の遺墨をも見た。

書裡江山遮眼明、浦湍曲々盪舟行、忽過絕壁忽奔瀨、盡日盤旋不飽情。

俠骨稜々世所聞、淋漓筆墨見遺文、九泉豈有子推恨、明治恩光不及君。

當時青萍博士は、「明治恩光不及君」を慨嘆されたが、後聖恩枯骨に及び、御贈位の恩典に預り、今や清川神社として祭祀されてゐる。萩原井泉水は「羽越紀行」に最上川を評して

それは美しいとか、すばらしいとか云ふことではなく、ただ茫漠として、洋々として太古のやうな素朴さと、愚かしいやうな大いさがあるといふことが、如何にも東北の大河たる最上川らしい感じがした。

云つてゐる、流石は井泉水だ、「太古のやうな素朴さ」と、愚かしいやうな大いさ」實に最上川を凝視し、その大流の中にひそむ河神の魂を把握した、敏感な言葉である、この素朴さ大いさが、我が郷土民性の發露であらねばならぬ、日本文壇の雄將井原西鶴も酒田に遊んで、最上川の光景を讚美した一人である。其の著「日本永代藏」の、舟人馬かた燈屋の庭の條に

爰に坂田の町に燈屋云へる大間屋住みけるが(略)、此の國一番の米買入れ、惣左衛門云ふ名を知らざるはなし、表は三十間裏行六十五間を家庫に建てつ、け、臺所の有様目を

覺しける、米味噌出し入れの役人、焼木の請取り、肴奉行料理人椀家具を預り、菓子のおき、荳茗の役、茶間の役、湯殿役又は使番の者を極め、商手代内證手代、金銀の渡し役、入手の付手、諸事一人にて一役つ、渡して物の自由を調へける。

又「一代男」に

羽後の坂田に着いた、この浦の景色、櫻は波に映り、誠に花の上漕く蚤の釣舟を讀めるは此處ぞ。

酒田の繁榮を語り、袖の浦の春景色を、例の西鶴一流の筆致で、その流るゝが如き情緒を讚美してゐる、又古松軒は「東遊雜記」に

清川よりは酒井侯御知行にて、豪家も見えて風俗もよろしく侍りし、人足に出るもの衣服賤しからず、馬までも肥ふみり、形も美々しく、山川草木、上々國の風土なり。

庄内に入つては自然も人も美しく、上々の國の風土だを稱讚した、俳人沼波瓊音はその最上川紀行に左の如く感想を述べてゐる。

我が嬉しき特色と覺えしは、迂曲甚た多くして風色の變化盡日飽かざるこゝなり(略)、艫

に出て、苦にもたれ、悠然として眺むる間、我、我を忘れぬ、短き時に多くの事を成さんとするの燥氣、人の波押分けて我疾く進まんとする焦慮、時代の潮流に對する憤、境遇の壓迫に對する悶、これら一切の苦難はこの清き最上川の水に溶け去りて、我が心未だ繁鎮なる人間の約束を學ばざる昔に返りしが如し。

人間一切の苦惱を最上川の清流にながし、繁鎮な人間の苦を捨て、自然に歸りたいと洩らしてゐる又自然は人物を造るさいふ見地から庄内人を評して、

庄内の人の性格は地勢の生むところ、單純にして安らかなり、又庄内出身の兵は演習に拙き事甚だし、しかも實戰に臨んでは虎よりも猛なりきは、軍隊にての定評ききく、庄内人の特色はこの一言を以て窺ひ知るべし、此の撲實なる美風の永く傷けざらんことを祈る切なり。

單純にして安らかな……質樸な氣性と、恰も竹林に眠れる虎の、猛然として起つ雄々しい勇氣を大いに稱揚する所あつた、庄内藩主酒井了恒(忠實)が、明治戊辰の孟秋、命を受け東行して清川を過ぎた、一詩を吟じて意氣豪なるものがあつた。

清峽關前津吏迎、千軍停馬々悲鳴、掉歌齊唱連帆發、是不尋常傷別情。

英雄亦た涙なきにあらず、別離の情綿々として盡きざるものがある。庄内の天地は最上川に配するに鳥海山を得て更らに壯美を完ふす、今、一大虹霓の如き兩羽橋畔に起つて瞰望する時、漢江は溶々として流れ、鳥海山は天霄を摩してゐる、實に壯大の氣分にうたれざるを得ない、赤水嘗て歌ふて曰く、

鳥海山高北海陬、岳雲溪樹望悠々、不知何日大鵬翼、化作名山鎮羽州。

羽州の鎮たる鳥海山ミ、百川を合せ得たる最上川ミ、豊穰なる平野と、怒濤巨岩を嚙むの壯大な自然ミに、恵まれた庄内は幸福である、歌人海上胤平は

さやかにも流れてけりな最上川

八十くまでらす月の山水

庄内の大地を歌ひ得て餘蘊がない、近時若山牧水は

中高にうねり流る、出水河

最上の空は秋ぐもりせり

秋の日の出水河、よく實寫して趣味横溢の感がある。

最上川岸の柳に舟こめて

こまうちらはらへすめる月見む

之れ一代の英主酒井忠徳公の玉詠である、岸の柳に舟を繋いで光風霽月を見る、其の偉大なる人格と其の風流とを思はざるを得ない、池西言水は酒田で

蚤させし我恥ふるふ袖の浦

言水でなければ詠まれない句である、乙二は最上川の舟中にて

水雨ふりし雲おさまらず最上川

の佳句を吟じた、長翠は

水に空のしたしき秋や最上川

水空一体の最上川を凝視した、新派俳壇の權威者碧梧桐は酒田に泊つて、不玉の居らない寂しさをつくつく感じて、

昔ならば不玉の宿や後の月

の句を残して去つた、酒田には古來幾多の俳人が來た、天和三年に大淀三千風も來た、西鶴も來た、旅人芭蕉は不玉の宿に泊つた、寒い寂びしい後の月が出たが、今は吟を共にするに足る俳人がゐない、懷古の情禁ずる能はずして、此の句をなしたであらう、最上川を詠んだ古人の句は多い、捨てがたい二三の句を左に書いて置く。

麥刈て稻舟見せよ最上川

貞徳

川つばめ又手さす邪魔と見ゆるかな

其角

棹もげに世の中よかれ最上川

惟然

稻舟にやすみかねてや飛ぶ螢

曾良

袖の浦思ふあたりを雲の峰

支考

毛見衆の船さし下せ最上川

蕪村

何れも作者の個性と、其の作句の形式とがさまざまに現はれて面白い句である。又古來天地を逍遙する旅人は、身を最上川に托して詩に歌に詠嘆したものが尠くない、玄齋翁の弘采録にひなさかる鄙人にして、おほふけなき、わざにはあれど、いにしへの、かしこき道の、し

のぼしく、見ぬ人しのぶ戀の山、たきくしくも分けそめて、神のみ史や敷島の、大和歌さへゆふたすき、かけて習ひつしかくくに、宿世の山のしくせより、幸なきさかかなぞもなく、奈曾の白橋ミたえして、そこもしれぬ埋木の、藻に埋る、最上川、のぼりかねたる稻小舟、下る手ふりのさかなさを、なげく涙は白糸の、瀧つ流れの早ければ、包むに余る袖の浦、うきをたつねて有耶無耶の、關のこなたに獨りのみ、すみた川原にわびつ、も、經にける年を數ふれば、六十あまりに老ひぬれど、きし心は眞曾鏡、くもらぬ友ミ仰き見る、月のみ山ゆさしのぼる、ひかりなりけりその月の、光もあやなかけ高き、阿姑屋の松にさへられて、世に出がたき身ミやなりけむ。

不遇を慨して此の地の名所舊蹟を詠み込んだ長歌である。埋木のかくれて朽ちぬる悲愁を歌つてゐる、埋木は最上川の名産であつた、「春波樓筆記」に

出羽庄内領飽海郡、文化甲子夏六月、大に地震して最上川の水底より古木を出たす、豫州扶桑木より上品にして、紫檀の如し。

といつてゐる、又文政七年儒者朝川善菴、最上川埋木の記を作つた、其文に曰く

出羽國最上川水底亦有埋木、黑質黃文細緻堅實、敲之聲甚響而清遠、不問知其爲洪荒時物也、夫木自萌蘖而拱把連抱、歷幾星霜以至於如斯能大、但其命數有限、或枯或仆不盡其材然山川之所、鍾靈氣之所感、或有神物愛情衛閭之、沈埋耐久以待材顯於後世、又有時乎洩其秘、其理固有故也、拙逸堂主人、權巧有思、精攻木之技、凡什器出其手者、人爭購之、一日見爲奇貨、採伐製器以充文房之用、木質固堅良、又且泐而磨之、磨而光之、黝黑如漆而古色可掬、其用工之精、而爲用之周、非常之材、至今日重顯于世、又吾東方君子之國、以木德勝於三方、亦於是乎可見矣、則此木豈獨爲一文房之而已哉、因爲之記

白河樂翁公に使へた野川老女の「旅路の露」、最上川を下る歌に、

最上川朝ぎり深く立ちそひて

あさせしら波たさる舟人

いく千尋くりおろすらん山姫の

手にまかせたる白絲の瀧

樂翁公は右の一帖に

見ればまたいまもしのぶのすり衣

旅路の露ぞ袖に亂る。

(六)

書き添へてある、繪畫にも最上川を題材にとつたものが頗る多い、今より百八十餘年前の最上川と酒田港とを寫した極彩色の繪卷や、寒河江陣屋から所管地の貢米を河岸出しをした光景の圖卷などもある、殊に廣重筆最上川六十餘州名所圖繪の酒田湊は、

清朝の濃藍參差の松樹に白砂を對照して、白帆に風を孕ました船の、月山をまごもに、最上川口をのぼり行く

風光を畫いてゐる。洋畫壇の重鎮吉田博壽伯の筆になる「最上川中洲渡船場より酒田港を望む」「袖の浦より酒田河口を望む」の油繪や、畫伯中川八郎の「酒田港の入口」を畫いた油繪などは何れも逸品である、其の外清川の清峽を畫いた河合新藏の油繪、太田義一の最上川十二月、松田修平筆の「最上川より月山を望む」の圖、最上川を實地探勝して寫生した朝一圭鳳の「漢江畫帖」など、何れも趣味豊かな作品である。

旅人と最上川！、私は多くの旅人によつて稱美された最上川を見た、そしてその中に滲み出

てゐる人生味、自然と人生との間を來往して、魂の即き離るゝさまぐの姿が、私をひきつけた、旅ゆく者のみ感ずる孤獨、寂寥、自由をも味つた、私は嘗て少年時代に最上川に孤舟を浮べて、寺津から酒田まで下つたこゝがある、雄大でしかも繊細な、活潑で而も靜寂な、恰も凱旋將軍のやうな、又詩人のやうな、急湍奔瀨があるかと思ふに、汪々として碧潭をなせる變幻極まりない妙趣が、小さい胸に深くもきざまれた大江の佛を思ひ起すについても、李白の詩、

朝辞白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山。

を歌ひ行けるロマンチックな心持になつて、無限の興味を感じる、今此の稿を終ゆるに當つて最後に一言したい、一般に日本人は自然に親しむに云ふ考が少ない、従て旅行の趣味を解しない人が多い、田山花袋翁は嘗て曰く

小生はかねてより日本人の天然に對する感の薄きを慨くもの、一人に候、西洋なきにては農夫商賈の卑きに至りても、皆親しく天然に親炙し、恰もおのれの親かなんぞのやうに、或時はその懷に抱かれ、ある時はその袖に縋り、悲しき時は天に叫び、嬉しき時は地に伏すこいふやうに、萬事天然に對しての感の起しかたが、深く鋭くしかもやさしく候、され

(九九)

ば讀本なきを讀みても、草や花や山や水の事を記したるもの多く、且つ親切に候、決して日本人の如く、老いても猶野の草花の名を知らぬやうなるものはあるまじく候、日本人は概して天然に對しては、冷淡に候、他人か何んぞのやうに思ひ居候。

旅行は一種の道樂だ、然しこれほご愉快な趣味ある者はない、山水放浪の癖あるものにあらずれば、烟簍雨笠の興は知らない、芭蕉翁の詠みたる

くたびれて宿かる頃や藤の花

夕暮の宿の一風呂の心地好さは、旅人ならては知られぬ興趣である、花が咲いたさて何が面白いか、赤い月が東山に出たさて何が愉快であるか、旅窓に雁の聲を聞いたさて何の情味があるらう、花より團子だ、月より黄金だ、雁の聲よりもその肉だ、雁を鐵砲でうちこめて、食べたらすぞやあまの川だらうといふ俗物は可なり多い、従て日本の文學の上に巨作大篇がないでもない、然しこの天然の美を背景に、不言の裡に無限の興味を備ふやうなものが尠いのは惜しむべきである、正法眼藏の山水經に

おほよそ山は國界に屬せりといへども、山を愛する人に屬するなり、……世界に水ありき

いふのみにあらず、水界に世界あり、水中のかくのごまきあるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり、法界中にも有情世界あり、一葉草中にも有情世界あり、一柱杖中にも有情世界あり、有情世界あるがごまきは、そのごまきかならず佛祖世界あり、かくのごまきの道理、よくよく參學すべし。

山川草木悉く有情世界である。佛の世界である、實に偉大ではないか、崇高ではないか、自然に人生を來往する旅人は、この心を以て心させねばならぬ。

八、光榮の最上川

叡聖文武なる 明治天皇は、夙に維新の雄圖を定め、政務を視そなはせ給へる間に、四方を巡狩して親しく民生の疾苦を察し、教育殖産の業を獎勵したまひ、明治十四年九月、三伏の炎熱を冒し、萬岳の絶險を踏へ、遠く我が羽州の民情を御視察あらせられた、厥仁厥德、聖恩洪大誠に感激に堪へざる所である、秋田縣下院内から 鸞輿始めて我が縣に入らせ給ひ、及位の

小驛に御小休あらせられた、及位川の谿流は君が御代の千秋を歌ひ、對岸の峭壁は動かぬ御世を誇いた、飛泉數條、碎けて白雨に爲り、沈んで深潭に爲るの光景を視そなはせられた 主上は、樓に御して、一等編修官川田剛に命じ、詩を賦して上らせ給ふた。

絶壁懸崖碧瀨奔、誰圖龍駕此停驂、鹽根嶺近連山脈、漢江川初見水源、

淵底潛鱗驚日影、雨餘古木浴天恩、從來四海皆王土、何處雲林不禁園。

普天の下卒土の濱、王土王臣にあらざるはない、この勝景も悉く禁園であると斷ずるに於て千鈞の重みがある、里民は歡喜して御輦を迎ひ奉つた、錦を粧ひ玉だれの小簾もゆら、に、白菊の花ふさ匂ひえならず、實に嚴かにあらせられた、里民は家毎に御酒に併、はた饌米なご机に備ひ、高杯に蓋、門邊に莚うち敷いて、老若男女躡り居たるなご、民の誠のこもれる振舞はず、ろに泪ぐむばかりであつた、廿三日曉天車駕新庄の行在所を發し給ふ、從駕の臣文學御用掛兒玉源之亟歌ふて曰く

厨人相語夢初驚、起理行裝天漸明、山郭風煙秋已冷、樹頭曠影博勞鳴。

車駕本合海の津口より船橋を渡らせられ、盤根新道を度らせたまひ古口に御着輦あらせられ

た、里民綱魚して天覽に供へ奉り、その獲る所の鯉鯪なごを献上した、それより絶勝清川の清峽に、青壁雲烟中に素練縹々として懸れる白絲の瀧をも御覽になられたであらう、又躡を東雲橋に駐めて、砂金採集の状をも覽そなはされたであらう、縣吏松井秀房が

君の恵にくらぶれば、淵やは深き最上川、瀧の白糸くり返し、けふの行幸を仰くなり

ご歌はれたのも、海上嵐平が

立谷川瀨々にひかりて黄金さへ

流出ぬる君かみ代かな

ご詠まれたのも此のをりである、稻倉嶽北方に高くそ、り立つて、白雲の棚引きたる風景佳絶である、大寶寺村を経て鶴岡に來る道すがら、杉宮内太輔は一詩を賦された

萬山行盡望原田、渺々黃雲天未連、父老相欣歌頌起、迎 鸞駕又祝豐年。

豐穰の秋、鸞輿を迎ひて欣喜踴躍する農民の有様が、まのあたり見へるやうである、車駕は新堀村の御小休から最上川の中洲なる小牧村の御召換所に着かせ給ふた、稻舟集に

主上は爰に憩せ給へり、村のはつれは最上川にて渡りいと廣かりしかば、御船はあれと容

易らでなむ思はれける、川の岸邊に御召換所を構られたり、此程雨いたく降り程に水増て常よりげに流早し、か、れば棹さし真楫はねつ、渡らむは、いかに覺束なしや思ひけん、流石に心得てかなたの岸より此方の岸へ大綱二筋引はへたり、頓て渡せ給ふに、水士も大綱に諸手打かけてくり渡りに渡る、御船の屋形はかにはまさ真揃に玉はまかねぎ、紫の幕打めくらししてよそほひたるかけ流にうつれば、浪もあやにぞ見えたりける。

紫の漫幕をもて飾りつけたる最上川渡船場の光景、まのあたり見る心地する、里人は小舟七八艘漕き出し、魚を漁る業して御覽に入らせ給ふ、天には今日の佳き日を祝ふ煙火の音が高く轟いた、又新庄より舟形驛を過ぎ溪流涼々、一路蜿蜒たる猿羽根峠から、東南に淺見刈田の諸峯、西北に横亘する月山葉山稻倉山の高嶺の雲を凌ぎて神さひたる、雲霧の中から流れいつる最上川の光景に、旅の御心を慰めさせ給ふたであらう、聖化雍熙、遍く邊陲の此の土に轍のみ跡を印るさせ給ひ、隠れたる羽陽の山河は天日を得て光りか、やいた。

更らに明治四十一年九月、大正天皇末た東宮に御在しまし、をり、東北諸縣に巡啓して人情風俗を熟察したまふや、縣民は真心こめて、鶴駕を迎へ奉るの光榮を歎んだ、奥山に羽水に雨

露に浴して光りはいやましに映えた、然るに、あ、我が郷土の山も河も、行啓の日に變りはおらねぎ、大君ははや神去りましぬ、悲痛の極みである。

大正十四年十月、畏くも、今上天皇陛下未た東宮にまし、て攝政したまへし御時、本縣に行啓あらせられ、親しく教育、産業、民情、風俗等を御視察あらせられたるは、百萬縣民の感佩措く能はざる所である、殿下には農村風物を深く御氣に召させられ、

山形縣は景色が好い處だ

この御言葉あらせられたる云ふことを拜聞す、我が郷土の山河亦た光榮ありと申すべきである、特に大正十五年一月十八日、宮中歌御會始に於て、新年御題「河水清」に對し、畏くも

東宮殿下には、最上川を主題と遊ばされ

廣き野を流れ行けとも最上川

海に入るまで濁らさりけり

と詠ませ給へる御風懷を拜誦して、我が郷土の蒼民誰れか感激に咽せざるものあらんや、この不磨の玉韻によりて、奥北の最上川は、新に光彩を發揮せられたり云ふべきである、之

れ郷土史を彩るべき花であり、縣民教化の大本となすべき、曇りなき鏡である、古來最上川は我が郷土文化の母である、各部落も之れによつて構成され、山野の土地も之れによつて開墾され、産業も教育も之れによつて育まれた、我等の祖先も之れに依つて生き、すべての文化も之れによつて發達した、實に最上川はひゞり物質的恩恵を吾人に與いたばかりでなく、精神的に寄與した恩恵は更らに多大である、又供奉された牧野内大臣は

瀬ももなり淵ともなりて最上川

なかれの末も澄み渡りけり

この高吟を詠進せられてゐる、大岡硯海嘗て歌ふて曰く

踏破雲山又太原、原頭遙見月崑崙、天高氣潔人純樸、最上長江自有源。

實實剛健の縣民性も、一朝一夕にして成つたのではない、最上長江自ら源あることを忘れてはならぬ、吾等は祖先の残した崇高なる傳統の強き足跡を、清純なる環境の教訓とに陶冶せられて、實實剛健なる郷土民性を築きあげたのである。將來も亦たこの精神を持續し、赤誠を披瀝して忠君愛國の精神の發揚に努力せねばならぬ。

あ、光榮の最上川！ 汝は光輝ある鏡である、百川を合せ得て而かも濁らざる清澄は、如何に長久の歲月を經過すとも、依然として清く流るゝてあらう、汝は永劫の面影である、神の御座である、活動と靜寂とを兼ねた最上川の自然美は、皆神の顯現である、見よ、動の極致は靜であり、靜の極致は動ではないか、動に於て靜を感じ、靜に於て動を感じるは宇宙の大法である。あ、恵まれたる最上川よ、そのせ、らぎの聲よ、永遠に若く、久遠に清かれ。

昭和七年二月五日印刷
昭和七年二月十日發行

小定價金二十錢

山形縣廳社會課內

山形縣聯合青年團

印刷人

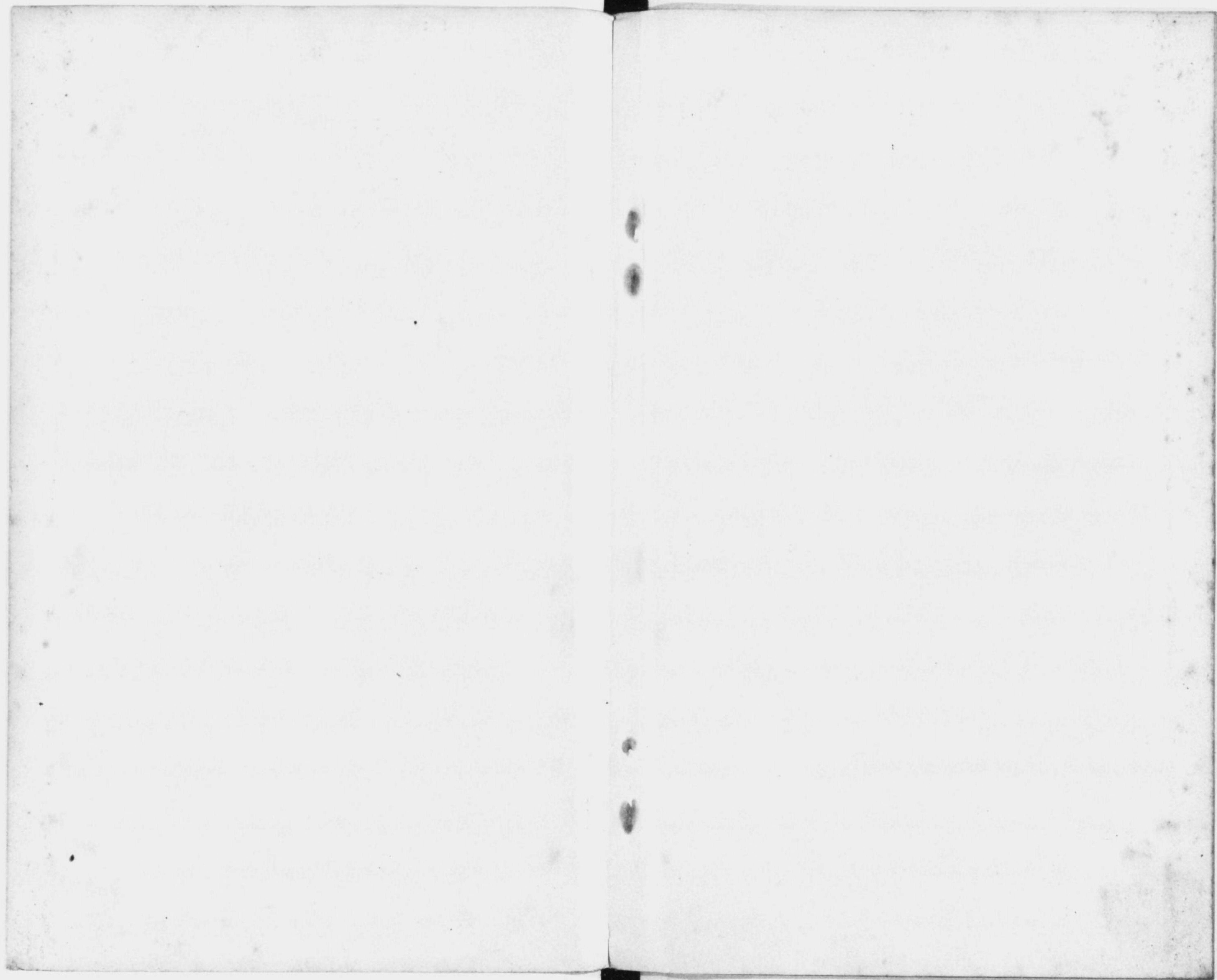
山形市旅籠町五一三

熊谷末藏

印刷所

山形市旅籠町五一三

熊谷活版所



終

